
贖罪への階段

柏木匡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贖罪への階段

【Nコード】

N5743H

【作者名】

柏木匡

【あらすじ】

魔術・神秘・異能者・そして異形種が存在する世界。神が施した異世界（地獄）の結界が綻びを見せる。3つの組織と国家さえ巻き込み互いに策謀を巡らせる。

贖罪への階段 プロローグ（前書き）

第2作目の素人ですがよろしく願いします。

グロは控えめで行こうとおもってますが
演出上増える可能性があります。

その手が苦手な方はご遠慮ください。

贖罪への階段 プロローグ

男は空に飛び出していた。

無論、それは飛行ではなく落下である。

大気の層は、男を支える事が出来ず重力に引かれ地へと堕ちていく。

男が飛び出した地点である屋上には、届かない手を差し出す女性
がいた。

頬を涙が伝い、表情は苦悶に満ちていた。

隣には先程まで対峙していた男の姿があつた。

彼もまた憐れむような表情で男の落下を見届ける。

「悪い事をした……」

それはこの一連の事件でなく、女性に涙を流させてしまった事だ
つた。

彼女を巻き込むつもりはなかった。この場を一刻も早く離れてほし
いと願った。

計画に彼女は必要ではなく、結末については男のシナリオ道りのは
ずだった。

だが、最後に彼女がこの場に現れた。落下する男には予想外であ
つた。

長く綿密な計画を立て、準備に莫大な時間を費やした。

罪を負うべき者が負い、そして汚れた自分を処分する。

最後に彼女の心に傷を刻み込んでしまう事なるとは思っていなかった。

計画を遂げるために捨てたはずの感傷が静かに疼く。

男の持つ術式を用いれば、この落下などとるに足りない事だった。それを使用するつもりは男には無い。

術式は人を殺める為に獲得し、己が復讐の為に使用したのである。

何かを叫んでいるようだったが、落下する男には空気の抵抗による音しか聞こえない。

男は灰色の地面へと吸い込まれていく。

「あいつもこんな感じだったのだろうか……」男は静かに目を閉じる。

最も大切な想い出を血なまぐさい記憶から紡ぎだす。

浮かんだのは、たった一人の家族である妹の笑顔だった。

屋上には、二人の姿がある。

一人は厚手のロングコートを纏い、手には皮手袋をはめていた。

もう一人は屋上の淵の前で、うずくまり愛する者の死を悲しんでいる。

男は屋上を後にする為に階段へと向かう。

女に掛ける言葉も慰める術も持つてはいない。
記憶に關係する術式は、あるが深く刻み込まれた記憶には効果がな
い。

例え、今の出来事を記憶の奥深く抑え込んでも女の男に対する全ての
記憶までは押し込むことはできないだろう。

屋上を去りゆく男に女は叫ぶ。

一瞬、男は立ち止まったが肯定も否定もしなかった。ただ歩みを進
める。

鉄製の頑丈なドアを開け階段を下る。

ドアが閉まる時、女の素朴で簡潔な疑問が聞こえた。

「なぜ……彼が……なぜ……」

質問には誰も答えられないだろう。

答えを持つ人物はこのビルの遥か下アスファルトで有機物の塊に
変化しているからである。

男は階段を下る。一連の事件はこれで解決した。

男は降りながら先程の戦闘で破れたコートの個所を確認する。

「救いようがないな……」

それは破れたコートの事なのか堕ちた者への言葉なのか自分に対
する戒めなのか
当人にもわからなかった。

これより話はこれより少し過去に戻る。

贖罪への階段 プロローグ（後書き）

稚拙な文章を読んで頂きありがとうございます。

これより少し日付が戻って話が始まります。

8月20日 追記

修正作業に入りました。

1～20話まで、誤字脱字や表現などを修正していること
思っております。

贖罪への階段 第1話（前書き）

グロテスクな表現や残酷な描写がある場合がありますのでご注意ください。

オフィス街で起きた残忍な事件。

その現場に一人の男がいた。その男の目的とは？

贖罪への階段 第1話

夜が明けようとしていた。

空から暗闇は押し出され、徐々にその範囲を減少させて行く。闇の中で、墓標のように見えるビルが並ぶ一角も墓標から生氣溢れる生活の場へと変わっていく。

生ある者が暮らし、太陽の光が差し込む一角。そこに相応しくない『物』が置き去りにされていた。

ビルの片隅にあるゴミ集積場。

黒いカラスが餌の所在を鳴き声で知らせる。普段の生ごみではなく新鮮な肉をついばむ。

飛び交う蠅は、子孫を残す為に産卵に適した場所を吟味していた。

コンクリートの壁には、赤い液体で大きな円が描かれていた。円の中にさらに小さな円が在り、その隙間に太古の文字が規則正しく記されている。

その幾何学模様の中心には、人間が張り付けにされている。体は損壊され、糸の切れた人形のように力なく垂れ下っている。

悲しくもこの惨劇の現場を発見したのは、このビルに勤める女性だった。

悲鳴が朝を迎えたビルの谷間に響き渡っていく。

現場には黄色いビニールテープが張られ、辺りは騒然としていた。野次馬は身を乗り出し、起きた事を知ろうとする。

それを制止する警官の怒号がより野次馬を興奮させていた。

「こりゃあ……酷いな……」

第一報により駆けつけた警察官達もその惨状には息を呑んだ。

新任の鑑識や刑事に限らず、場数を踏んできた猛者達でさえ言葉を呑む。

通報者は毛布を掛けられ、放心状態であった。

刑事達も事情聴取より医療機関への移送を優先させる。

救急車に両脇を支えられ乗せられていく。

野次馬の中にダウンジャケットを着た人物がいる。

身長は170程度だろう。成人男性にしては小柄な部類にはいるが鍛え上げられた筋肉は、成人男性を平均を軽く上回るはずである。

男は野次馬をかき分け地下鉄のホームへと向かった。

改札をくぐり、混雑がない下りのホームへと向かう。

売店でコーヒーを買い列車が到着するまでベンチへと腰を下ろす。

男の目的は達成された。缶のプルタブを起こし口へと運んだ。呑んだ液体が、食道を冷やし胃袋に到着した事を告げる。

同時にホームへ列車が滑り込んできた。

目の前を流れる列車の窓に男の姿が映る。肌には年齢を感じさせる年輪が刻まれていた。

色は浅黒く、顎には無精ひげが生えている。

列車によって乱された髪の毛を直す。ドアが開き、人が流れ出てくる。

男は座席に座り、目を閉じた。

「まずは一人……」心の中で呟いた。

列車は街の外へと向かっていく。

贖罪への階段 第1話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

8月20日 追記

修正しました。うまく表現ができませんね……
アドバイスを頂けたらうれしいです。

贖罪への階段 第2話（前書き）

グロ耐性がない方は注意してください。

贖罪への階段 第2話

部屋の空気が淀んでいる。それは住人の紫煙のせいだけではない。魔術を行使すると空気は、その作用により影響を受け変化する。

フローリングの床には、脱ぎ捨てられた血痕付きのシャツが投げ捨てられ

紅い点は転々と部屋の中心まで続いていた。

部屋の中心には、男が上半身裸で立っていた。

右鎖骨から左肋骨辺りまで裂傷が走っている。傷に手を当てながら小さく呟く。

一呼吸置き、違う言葉を呟く男の手が靄に包まれた。

男はその現象を確認しながら傷に沿って手を移動させる。

先程までの出血は徐々に弱くなり、二往復する頃には激しい裂傷も引つかき傷程度に復元されていた。

男は大きく息を吐き術式を終える。

男は傷の治りを確認し、テーブルに置いてある冷めたコーヒーを口に運んだ。

呑みながらTVを付け部屋のカーテンを開ける。

薄型の大型テレビからは、かわいらしい笑顔のキャスターが笑顔で天気を伝えていた。

床に落ちている白いシャツで、床に落ちている自分の血痕を足で拭いていく。

拭き終わると『燃えるゴミ』とテープが張られたゴミ箱へ放り込んだ。

二杯目のコーヒーを作り、キッチンへ向かった時、男の耳に気になるニュースが聞こえてきた。

アナウンサーは深刻な表情で事件の詳細を告げる。

事件の内容は、本日早朝未明にオフィス街の一角で男性の変死体が発見されたとの事だった。コーヒーを作り終え、ソファに腰を降ろす。変死した男性は紅いペンキのような物で書かれた円の中に張り付けられていたらしい。

事件の詳細はその程度の事だった。

既にニュースは、次の項目へ行っておりスポーツ選手の活躍が報じられている。

男はチャンネルを変えて情報を集めたが、どれも似たり寄ったりの情報だった。

TV消し、情報を整理する。

男性が殺されそれは円のなかに張り付けにされたという事。人が殺害されるのは珍しい事ではない。四六時中なんらかの事情で命を失っている。

男が気にかけているのは殺害の目的と犯人が一般人か否かである。

犯人が一般人の場合、例外を除き司法関係の管轄である。

しかし犯人が魔術協会関係や正教会関係者又は仏教協会であれば、その組織の担当者の管轄に変わる。
異形の者が犯人の場合は、3組織が担当者を出し共同で処分もしくは捕縛という事になる。

だが異能力者だった場合は、司法機関ではなく軍内部の組織の出番になる。

これは異能力者を開発、管理しているのは軍部だからである。
これら組織は表向き友好関係ではあるが、裏ではお互いの潰し合いは日常である。

軍部に関しては他の3組織とはノータッチでお互いの抗争も黙認している。

男は自分の出番が早々に回ってこないように祈るだけだった。

先日もよる異形の狩りに駆り出され、同行者12人中8名殉職、残り4名重症という

散々な結果である。本人も背中に重症受けこの有様だ。

亡くなった仲間には知り合いもいたが相手が悪かったというしかない。

異形というのは人ではなくこの世界の生物ではない。

他の世界からの侵入者である。無論エイリアンの類でもない。

次元の狭間に侵入抗を開けこつちの世界へやってくる生物である。

現世界と地獄と呼んでいる世界には次元の壁が存在し、通常は侵入不可能である。

さらに『神』と呼ばれる者がその間に、結界を張り巡らしてある。

それは網の様な構造をしており、魔力が大きい者ほどその網目に拘束され

こちらには侵入できない。

だが結界は遠い過去に作られたものである為、時折綻びができる。

地獄の上位種には、この網に干渉し網目を大きく広げる者もいる。広げたところで本人はその程度で侵入出来ないのだが、その網目に小物が侵入するのである。

他の次元に幽閉されている程の生物である。人間が魔術や神秘さ
らに異能を駆使しても

多大な被害が出る。

その力に魅せられ、魔術士の中には禁忌を犯し異形の者との交流を
持つ者もいる。

男は取りあえず眠ろうとベッドへ倒れ込んだ。

昨夜の闘いで魔力は皆無だったし、男の戦闘スタイルは終了後
筋肉や骨が悲鳴をあげる。その為休息は必要だった。

体からの苦情を極力聞き流しなら、つかの間の睡眠を楽しもうと
する。

肉体の苦情が脳の睡眠に敗北しようとしてる時、ドアが激しくノッ
クされる。

男は枕を被り、寝ようと試みるが一向にノックは止まず激しさを増
すばかりである。

このままでは近所からさらなる苦情が出てしまう為、返事をし男は
ドアへと向かう。

ドアの向こうにはシスターが仁王立ちしていた。その表情は怒りを
表す表情だ。

鍵を開け朝日の眩しさに手をかざす。

太陽の光を受けたシスターは男の挨拶を一蹴し部屋へと上がり込んでいった。

男は寝る事を諦め小言を言われる前にシャツを着て紅茶を出そうと心に決めた。

贖罪への階段 第2話（後書き）

ここまで読んで頂いてありがとうございます。

1作目の息抜きで書き始めたこの作品なのですが
いつのまにかメインそっちのけで書いておりました。

仏教協会（寺社仏閣関係）ですがよく読むと
フランス教会とも読みとれそう・・・

贖罪への階段 第3話（前書き）

グロはまだ出てきませんが
そのうち出てくるかもしれません。
耐性がない方はご注意ください。

贖罪への階段 第3話

シスターは部屋に入るなりキッチンへと向かっていた。

素早くヤカンに火を付け、持っていた革製のアタッシュケースからティーセットと茶葉の入った缶を出す。

湯が沸く間にシスターは冷蔵庫の中身をチェックし、ゴミの分別を確認する。

口に人差し指を当てしばし思案した後、食パンをトースターへ入れる。

再度、冷蔵庫を開け卵とバター・ハムを取り出し、素早く調理を開始する。

男はシスターの一連の動作に飽きれながら新しい白いシャツを羽織る。ボタンを留めながらベッドを直し、テーブルの上を片づける。

例えば女性がこの部屋にきて同じ状況であれば男も手伝うのだがこのシスターに限っては触らぬ神に祟りなしである。

TVを付けしばしシスターが落ち着くまで待つ事にする。

シスターは鼻歌交じりでフライパンを回し、素早く調理をする。あっという間にトーストが2枚、ハムエッグと良い香りのする紅茶がテーブルに並ぶ。

シスターは洗い物を済ませガラスのテーブルの前に座った。

男もそれに倣いソファではなく床に座る。もちろんシスターには

クッションを
提供することも忘れない。

「さあ食べてください。昨夜はお疲れ様でした」
シスターはドアの前での形相ではなく笑顔で食事を進める。

男は素直にパンにかじり付きハムエッグを口に運ぶ。

シスターの前で祈りもせず食事を開始したが、それを一向に責める様子はない。

このシスターは信者でない者が、祈る必要はないというスタンスなのである。

ありがたく胃袋に収め、紅茶をすする。香りも味も申し分ないカップに至っては

繊細な飾りや絵が書き込まれている高級品だとわかった。

シスターは食事がひと段落したのを確認し、話を切り出す。
男もカップを置きシスターが話し始めるを待った。

「何か私に言うべきことはありませんか？桐原拓也様」
シスターは怒りの表情に戻っていた。

桐原と呼ばれた男はシスターに謝るべき事とは思いつかべる。
沈黙のあと一つ思い浮かんだ事を口に出す。

「ごちそうさまでした。シスター」
桐原は食器を持ちキッチンへと向かう。

「片づけは私がやります。それよりなぜ命令を無視したんですか？」

食器をキッチンに置いて桐原は先ほどの場所へ座る。

「命令といっても捕縛は無理ですよ。被害はご存知でしょう」

桐原はシスターに柔らかく反論する。

命令とは昨夜の異形種への対処方法だった。

対象が異形種の為、魔術協会及び正教会の担当者の合同作戦であった。

捕縛命令を実行しようとしたが、あつという間に4人が即死
すぐさま殲滅に切り替えたが、かろうじて殲滅できたのが実状である。

「いえ捕縛命令の実行ではありません。生存者からの情報ですと
貴方は被害拡大の為、一時後退という本部の命令を無視なされた事です」

シスターは冷静に説明を続ける。

「増援が到着するまでなぜ後退しなかったのですか？
場所は市街地ではなく郊外の森です。なのになぜ……」

シスターの詰問はそこでひと段落をする。

桐原は理由を告げる。

「シスター あそこにはまだ重傷者が5名いました。
それを置いて後退するのは私の本意ではありません。」
桐原はシスターの目を見据える。

年齢でいうなら5〜6歳下の相手でも敬意は忘れない。

結果、異形種は処分できたが重傷者の一人はすでに息絶えていた。

「まったく貴方は無茶をしすぎです」

「確かに我が教会の調停者も5名死亡2人重症と聞いております」

そう話すシスターの表情が悲しみに変わる。

「ですが、無謀にもほどがありますよ」

このシスターは作戦となれば被害など心から除外する。

神の為、人類の為と犠牲を恐れない。

だが、ひとまず作戦から離れれば死んだ者や負傷した者には厚い慈悲を与える。

彼女は組織を問わず哀悼の念を表す。

「まあ無事であればもうこれ以上責めるつもりはありません」

そういうシスターは紅茶に口をつけ話の話題を変える。

話題とは本日早朝起きた変死事件の事である。

シスターの意見ではこれは魔術協会の管轄だと告げた。

「シスターまだ決めるのは早いんじゃないですか？」

桐原は当然の意見を述べる。

円といってもまだ魔術陣と決まったわけではない。

教会の神秘でもそれは使われるし過去に教会や魔術協会ですんだ者が異形種になる事もある。

異形種というのは地獄本来の生物や無生物を示すわけではない。過去に人でありながら魔術や神秘を追求し、人ではないものに自己進化

した者も異形種の分類に入っている。

代表例をあげるなら狼男や吸血鬼である。彼らを分類するにあたっては

生まれながらにしてその特性を受け継いでるものが純血種や直系と呼ぶ。

それとは別に魔術や神秘を駆使し人工的に飛躍した者を亜種と呼称する。

亜種に系列表記がないのは人工的に亜種になったものには生殖能力が皆無の為だ。

それらを総称して人口飛躍種とも呼ばれている。

他にも飛躍種は存在するが数が少ないのと世捨て人のように人類には被害を及ぼさない

者が大半の為、実害がないものには見て見ぬふりが現実である。

「いえ今朝、教会の方に貴方の本部から連絡がありました」
シスターは最後の一口を飲み干しカップの淵を指で拭う。

「日本支部ではなく魔術協会本部から直接です」

「この意味をおわかりにならない貴方ではないでしょう」

深く息を吸い込みポットから2人のカップに紅茶を注ぐ。

大抵の命令は支部から出る。それを通り越しわざわざ教会に釘を

刺すのは珍しい。

事件が起きるとまず通常の捜査機関が手順どうりに捜査をする。次にあきらかに殺害方法などに異常がある場合、3組織の支部に連絡がいく。

その3組織の上層部ですり合わせが行われ対処する組織が決定するのだ。

「で……シスターは協会の管轄になったのに何故わざわざ魔術士の私のところへ？」

桐原は煙草に火を付け、深く息を肺に吸い込む。

先端が紅く燃え煙はゆっくりととぐろを巻いた。

シスターは煙たがる事もなく、紅茶に口をつける。

「……今回の相手は非常に危険だということです」
テーブルに置いてあった桐原のタバコの箱を握りしめゴミ箱へ投げる。

「ご忠告感謝します。シスター生き残れるように神にでも祈りますよ」

煙を吐きながら天井を仰ぐ。

確かに本部直通の命令が出る事は禁忌を犯した魔術士か元魔術士の異形種である。

異形種であれば本来3組織の合同処分対象なのだが、魔術協会は自分の身内から

の人口飛躍種には内密に処理しようという風潮がある。

シスターにはこの話は言えない。この人は正義感の塊だからである。

「貴方は神なんて信じていないでしょう。罰があたりますよ」
シスターは神という単語がでるとムキになった。

神を桐原は完全否定してはいない。異形種が現れる前から魔術の世界では
地獄の存在を確認していたし、その間に巨大な結界が張られている
のも確認済みだ。
だが正教会の戦闘担当者である通称調停者が行使する神秘は魔力が
原動力であり、
地獄から異形が出現しても天使という存在は観測されていないので
ある。

「神が与えた試練ですか……それにしても趣味が悪い」
桐原は正直に本音を答えた。

シスターは手を組み祈りの言葉を囁く。

「わかりました。憎むべき魔術士の無事を祈ってくれるシスターに
感謝しますよ」

桐原は素直にシスターに無礼な言葉を言った事を謝罪した。

「わかって頂けたらそれでいいですよ」
笑顔でシスターは立ちあがる。

カップを2つ持ちキッチンへと足を運ぶ。
素早く洗いを済ませカップをケースにいれ玄関へと向かった。

「それでは桐原様……無事を祈っております」
再度両手を胸の前で組み言葉を囁く。先ほどより短い祈りであっ

た。

シスターは靴を履き玄関で頭を下げる。

「シスター……先ほど祈ってくれたではないですか？」

桐原は靴の履き終わったシスターにケースを渡しながら聞いた。

「先ほどの祈りは呑み終わった紅茶に対する祈りですよ？今のが貴方の無事です」

シスターはそう言いながらドアを閉めた。

閉める直前シスターは爽やかな笑顔とウィンクを桐原に送った。

「心神深いんだかよくわからないシスターだ」

苦笑いをしながらこれからの事を考える。

シスターの言うとおりであれば今日中には桐原の所へ協会からの使者が来るだろう。

現在この地区の魔術士は、昨夜の戦闘で動けるのは桐原一人だからである。

対象が飛躍種であれば桐原の生存確率は激減する。

使者が来るまでに最低限の肉体的休養をしようと再度ベッドへ戻る。

相手の状況はわからないが出来る限りのケースを想定しシュミレーションをする。

桐原が昨夜の戦闘でも生存できたのは全ての可能性を考慮しているからである。

時刻は午前10時を回ろうとしていた。

街は生者であふれ、遙か上空から見下ろせば凄惨な死など存在しないように見えるだろう。

地平では互いの利益や思想などを理由に争いは絶えない。

地下では追求から逃れた異形やそれを慕う人間が闇に包まれるのを待ち望んでいる。

贖罪への階段 第3話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

戦闘シーンさえまだ出てこないこの物語。

書きながら大丈夫か？と自問しております。

次か次でだせると思いますのでご了承ください

贖罪への階段 第4話

シスターは桐原が住むマンションを後にした。もう一度振り返り両手を組み祈りの言葉を紡ぐ、部屋で祈った時より力を込めて長い時間を費やした。

この時彼女は、桐原に持てる情報を全て提供した。それは彼の生存確率をコンマ1でも上げる為である。

魔術士は会得した術式の系統によるが、特化して習得しなければ効果が薄い。特化した術式は火力的に申し分ない。だが特化した分相性が悪い対象の場合戦闘能力は激減する。

逆に正教会の戦闘担当である調停者が使用する神秘の術式は防御・治癒・索敵など結界術式に優れ、攻撃手段の神秘は相性を選ばない。攻撃に関しては火力不足でそれを補う為、特別な力が付与した武器を携行している。

総合的には魔術士よりも生存確率は上だ。

日本の古来からの宗教である仏教の場合は単独での戦闘はなくそれぞれ3名から最大6名のチームで行動する。

結界担当・呪術担当・近接担当の3名である。6名の場合は前述の3名にさらに

普段表にでない血統依存者たちが参加する。

対人間には弱く、霊体や実体を持たない種族には絶対的な強さを持つ

ただ、古来からの伝統にこだわり術の開発、応用などは皆無である。

シスターは教会に向け歩き始めた。

この街では聖職者の服装はよく見かける。これは抑止効果をもたらしている。

シスターといえども聖職者に危害を加えればすなわち

正教会全体を敵に回すからである。これは人間に対しての抑止力にしかない。

シスターが桐原の自宅を訪問してる時。

日本の首都である東京霞ヶ関にある防衛省の会議室ではある案件が検討されていた。

暗く広い会議室には、広さに伴わない数人の制服組が映し出されたモニターを見ていた。

プロジェクターが映し出しているは実験報告と見られる各種データと被験者であろう肉体の写真である。

スクリーンの前でこの中の一人だけの背広組が説明を続ける。

「今回のテストにより、前回の実戦テストよりもさらに性能の向上が確認されました。

これにより今回から試験的に投薬されていた新薬の認可を頂きたい」

3つボタンのスリムなスーツを着込んだ男は言った。

「それにしても早すぎないかね？ 現に試験投薬した被験者の内4割は死亡……」

プロジェクターの反対に陣取る右一番右端の少佐が発言をした。

「生存者の中でもかなりの数が記憶の混濁、症状が重い者は自我の崩壊とあるが？」

少佐の後ろに立っている副官が上官の補足をする。

「ですが6割は生存しております」

スーツの男は額の汗をぬぐう。

この男にとってこの計画を破棄されては今後の研究予算のめどが立たない。

なんとしても続行させる為、無理を承知で試験投薬したのである。

「その6割だが実戦に使用出来るのは50人が妥当だろう」

中央に座る男が報告書を手に取りながらスーツの男を睨む

そして一瞥したあと言葉を続けた。

「能力的に開花しても精神的に不安定であれば兵器としては失格だ
最低限、敵と味方の識別と一般人への対処は叩きこんでおいてほ
い」

実際生存者の6割のうちの多くは精神的不安定を発症しており、
対応能力や

独自判断など多くの点で課題が多かった。

スーツの男は報告書にこの事は書いていない。

精神的な不安定さをこの場で指摘されるとは予想だになかった。慌てて中央の人物にアピールできる要素をさがす。

「まあ君……問題が起こる前に不適合者を処分したまえ」
中央の人物が背もたれを軋ませながら言い放った。

「処分ですか？」
スーツの男は一瞬戸惑った。処分となると人数は500人を軽く超える。

「そつだ……処分だ」
中央の人物は右にいる少佐へ何事か命令をした。スーツの男へ顔を向けさらに続ける。

「処分は我々の方でやるとしよう。時間は明後日だ。それまでに移送の手はずを整える
それと今回の適合者の何名かを選抜しておきたまえ」

少佐は席を立ちあがり中央の人物に敬礼をしたのち退室した。

「どういうことでしょうか……」
スーツの男は中央の人物の名前を知らない。
知ってはならないのがルールである。

「わからんのかね？ 選抜した異能者で不適合者を処分するのだよ」
中央の人物がうんざりしたように吐き捨てる。

スーツの男も人体実験を何事もこなす人間だが、戦闘試験でも異能者の相手は

3組織から買い取った危機レベルの低い異形種である。

それを処分といいながら戦闘レベルでは大差ない同じ異能者をぶつけようというのだ。

男に拒否権はない。受け入れなければ研究は彼から剥奪され成果は別の人間に渡るだけだ。

「わかりました。移送及び選抜者の選考を開始します」

「でわ……予算の方はいかがでしょうか」

これで予算が獲得できなければ意味がない。

今まで殺してきた人間とこれから死ぬ人間それでも研究がしたかった。

脂汗を拭い、ネクタイを緩める。

「よかるう。予算の追加要求を認める。それと選抜以外に腕のたつ者を2人程よこしてくれ」

中央の人物は報告書を机で揃えながら付け加えた。

「どのような使用条件をお考えでしょうか？」

いくらスポンサーでもデータもとらずに消耗されては困る。

メガネを治しながら博士は聞いた。

「私は2名出せといったのだよ？ 安心したまえ解析データはそちらに渡す

観測班はこちらで用意する。いいな……2名は習志野に回せ。以上

だ」

中央の人物は立ちあがり副官らしき人物が先行する。

全ての人物が退室し、会議室には博士一人になった。

戻ったら急ぎ選抜者のリストをつくらなければならない。

いくら適合者とはいえ状況によっては不適合者に倒されてしまう。戦闘能力と精神的な屈強さを持つ者えなければならない。

それと習志野へ送る2名も中途半端な者では駄目だ。

選抜者の中で何人戻ってくるのか博士にはわからなかった。

暗い会議室を最後にドアを閉める。

廊下は人工的な光で満ち溢れていた。博士もまた人工的な投薬と脳内への科学的手術で

光が差す表舞台へとようと目論んでいた。

ネクタイを閉め直し廊下を歩く。

彼が立っていた廊下の蛍光灯は両端は既に黒ずみ、点滅し交換のサインをだしていた。

贖罪への階段 第4話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

どうも説明ばかりですね・・・
お許しください。

贖罪への階段 第5話（前書き）

一部表現にグロテスクがあります。
苦手な方はご注意ください。

贖罪への階段 第5話

男は目的の地下鉄駅を出てねぐらへと戻ってきた。

今回の首尾は満足のできる結果だ。

入り口の探知型警報結界の過去反応をチェックする。

誰かがこの結界内に侵入すれば離れていても男に信号を送るが念には念をいれる。

本来結界とは魔力を供給する術者もしくはその代行となる術具が必要である。

男は先ほどまで外出していたので魔力を供給してたのは教会時代に愛用していた

術具である。それは過去、戦闘を旨とする調停者の中でも優れた能力を持った者

の遺体部分を教会の神秘で加工・付与した物である。遺体といっても全てではなく

頸椎の部分的な骨だ。

過去反応は無く、建設途中で放棄されたマンションへと入っている。

男はいつでも反撃できるように注意をしながら進む。

外敵の存在なしと確認が取れると男はやっと柱に寄りかかり毛布をかぶる。

次の目標を始末しなければならない。

男は浅い眠りに就こうとしていた。

現在の拠点であるにも関わらず、細心の注意を払うには理由があった。

本当ならば男は、教会側の人間である。身内に起きた事件をきっかけに教会から姿を消し、身分を偽造し相反する勢力である魔術協会へと入門したのである。

魔術協会では男は寝食を忘れ、未来必要とされる術式を徹底的に会得していった。

同期の中では戦闘特性も群を抜き、信頼を得るのには時間はさほどかからなかった。それでも必要な術式を全て覚えるには入門してからは14年を要した。

すでに40歳を目前にしていた。

男は全ての必要な物を用意したのち最後の仕上げを行った。

それは魔術協会では禁忌とされている異形種の召喚方法が記載されている本である。

中世、協会は異形種の研究を盛んに行っていたが、たび重なる失敗や召喚した術士自身が生体に乗っ取られ一般社会に被害をもたらす結果を招く事になる。

最大の被害は当時今よりも全盛を誇った本部を半壊させるほどの異形種を召喚してしまった為、本部は異形種召喚全てを禁忌に指定したのである。

男の計画にはこの術式が不可欠であった。

これから先、味方は己一人である。いくら魔術と神秘の両方を会得しても所詮人

にある事には変わらない。人工飛躍で人である事を捨てるには時間

がなかった。

人工飛躍が不可能であれば、異形種に肉体を捧げその契約として己が復讐を果たすのである。

男にとって復讐を果たせばその後自分の体がどうなろうと構わなかった。

禁忌が収められている本部最下層への侵入は容易だった。

鍵となる刻印を体に施している魔導士と呼ばれる者を殺害し、刻印部分を切り離せば

良いのである。男は自分に術式を授けてくれた恩師をためらわずに殺害した。

年齢は老いても魔導士である。まともに戦えば殺されるのは男のほうだった。

しかし男はさほどの傷も負わず勝利を手にする。

「何故、貴様が教会の神秘を行使できるのだ……」

恩師は男の術式は魔術ではないのを見破っていた。

「師よ　いくら高等神秘でもお気づきになりましたか」

男は血だまりの中でもはや顔しか動かせない恩師を見下ろした。

「よき魔術士になる男が……道を間違えおったな」

口から血の泡を吹きながら教え子の目を見る。

「道などとうに外れております。どうか安らかにお眠りください。」

男は両手を胸に当て祈りを捧げる。そして祈り終わったその手で老人の口を塞ぐ。

老人は死に直面しながらも教え子の目を見つめた。憎しみではなく憐みの目で。

遺体から刻印が刻まれた腕を切断し、男は協会本部最下層へ一気に侵入した。
途中何重にも施された結界を素早く解除し詰めている警備は例外なく殺害した。
魔術だけでは不可能な事だったが神秘を学んだ男は対魔術士のプロである。

「止まれ！ この先は・・・」

警備の魔術士が言い終わる前に術具で喉を掻き切る。

返り血を浴びることなく今度は魔術でもう一人の胸に大穴をあけた。

前方での結界喪失を探知した警備の一団が同時に詠唱に入っているのが見えた。

男は神秘の一つを詠唱し始め素早く距離を詰める。

一団の中央に火球が発生し巨大になっていく。

4人掛りの合成魔術である。

「さすが 禁忌の守りを任されているだけの事はある」

男は称賛をしながら残り10メートルまで距離を縮めた。

さらに距離を詰めるべくスピードを上げる。

「放て！」

中央の一名の合図と共に渦を巻いた巨大な火球が放たれる。

それは通路自体を覆う程の大きさだ。

これでは男に避けるスペースはない。それを見越した魔術士は称賛に値する。

男は火球に突進をする。左手を火球に向け小さくそして強く発動の言葉を放つ。

その瞬間男は火球に包まれた。爆音と熱風で床や壁は黒く変色し破片は火球を放った魔術士にさえ飛んでいく。

魔術士達は侵入者の排除を確信した。立ち込める煙は魔術士達の2メートル手前までできていた。

突如、眼前の煙から男が飛び出してきた。

魔術士達は勝利を確信し、次の一手を用意していなかったのである。

「すまない」

と短く男は呟き、一人に術具の短刀を投げつける。短刀は見事頭骸に命中し絶命した。

仲間のあつけない死。追い打ちをかけるようにもう一人の顔に右手を密着させる。

短い詠唱のあと魔術士の顔は煙を上げて粉碎されていた。

残り二名の魔術士は既に奇襲から立ち直っており、矢継ぎ早に詠唱を始める。

だが遅すぎた。男は左右両手を2人かざし火線の魔術を独自に昇華させた

術式を発動する。火線は初歩的な魔術で対象に一直線に進む、威力こそないが

詠唱時間と到達速度だけは秀逸だった。それをこの男はオリジナルの術式を織り込むことで殺傷能力あげたのである。

男の両手から放たれた火の線はあつという間に目標に着弾した。通常の火線では対魔術の術式が織り込まれたロープには威力を望めないが

昇華した男の術式は対象者をらせん状に包み込みあつという間に火柱に変えてしまった。

「ぐぎゃあああ……熱い……熱い」

火柱の中からは断末魔の悲鳴が聞こえる。

男は術具を頭部から引き抜き、燃え立つ火柱の間を走り抜ける。

禁忌が保存されている書庫まで男は到着した。

肩に掛けていたバッグから過去に師であつた老人の右腕をかざす。

見知らぬ金属で作成されたドアは音も立てずに空いた。

広大な書庫ではあつたが、どのような形状で色はなど事前に過去の歴史書をひもとき

下調べをしておいたのである。歴史書の記述どうりである可能性は低かったが

思いのほか早く手に入れることができた。

男は来た道を掛け戻る、急がなければ先ほどの合成魔術で発生した煙と轟音で

警備や戦闘に特化した争いごと専門の通称、担当者が駆けつけてしまふ。

さすがに男でも担当者とはやり合いたくない。

名称からは危険を感じさせないが、戦闘に特化し戦場に出しても生還している者だけ

に許された名称である。

幸い地下に入る前に教会の得意分野である結界を張っておいたので解除に時間が掛つてゐる。

結界の維持の為に使用した術具は、教会でも一部の者にしか使用が許可されない聖人を使用

した術具である。2度と手に入れられないだろうが優先順位は禁忌の方であつた。

男は海岸に接する壁に手を付け詠唱を始める。

見た目はレンガ作りの壁だが、何重にも結界が張り巡らせてあり破壊には手を焼く代物だ。

すばやく結界の綻びを探し、見つけ次第そこに破壊する為の目に見えない楔を打ち込む

12個の楔を打ち付け最後に愛用の短刀型術具を中央に叩きこむ。

轟音を発しながら不可侵である協会本部のしかも禁忌へと続く壁が破られた。

男は高さ数十メートルはあろう断崖から躊躇なく海へと飛び出す。

禁忌はビニールの中だ。濡れる心配はない。

そして男は人間としては初の協会本部に被害を与えしかも禁忌を持ち逃げした重罪人となつた。

贖罪への階段 第5話（後書き）

ここまでお読み下さってありがとうございます。

これからもよろしく願います。

贖罪への階段 第6話（前書き）

グロテスクな表現を使用する

場合がありますのでご注意ください。

贖罪への階段 第6話

桐原の部屋には魔術協会からの使者が来訪していた。

使者は至って普通の会社員にしか見えない。

はたから見れば保険の営業か車のディーラーといった所である。

二人は初対面ではない。幾度となく命令を伝え、そして報告をしてきた。

使者の名前はない。名前を伝える必要性がないため知ることは無い。桐原もその点を理解しており、携帯には番号しか登録されていないかった。

「今朝の事件だけでどうして魔術士だと判断したんだ？」

「しかももう処理対象は特定しているんだろ　そうでなければ君はこないものな」

桐原は本部の対応の速さに疑問を感じていた。

「ええ既に対象は特定されています。信憑性のある条件も揃っています。」

使者は正座まま背筋を伸ばし話を続ける。

「今回の対象者は日本人。元魔術士であり、ゲルフ・アクレス魔導士の弟子です。」

正確に話す。顔は笑顔だが目は笑っていない。

「アクレス爺さんの弟子か・・・厄介だな」

桐原はアクレスという老練な手腕と多彩な術式を所有した老人の顔を思い出した。

性格は温和だが特化して術式を覚える者が多い中、様々な系統の魔術に知識を

持つ魔術士だ。戦闘では多彩な術式とそれによって低下した火力を経験で補い

魔導士の地位を得たと聞く。

「日本人といったが担当者の経験はないのか？」

担当者であれば桐原と顔を合わせているはずであり、同じ日本人であれば

接点があると思ったからである。

だが桐原には一つの疑問があった。協会に追われる魔術士の中には日本人はいないはずである。いればリストに名前がのる。

桐原はリストに日本人の名前がない事は知っていた。

「ええ担当者としての経験はありません。桐原さんも疑問に思っている事でしよう」

「何故、リストにない日本人の魔術士を追うのか、しかも本部が直接です」

使者は桐原の疑問を感じていた。だがこれ以上話すべきか考えているようだった。

「言えないなら無理はしなくていい。」

「術式の系統や戦闘スタイル、本部が追うのだから処理だけではないだろう？」

桐原は素状より、実際戦闘になった場合に重要な情報がまずは必要だった。

協会が処理しろという事に異議を唱えることは自分も追われる事を意味する。

対象がどのような信念や理由をもって逃亡者となったのか詮索はしたくない。

それは桐原自身が生き残る為に、迷いは命取りになるからである。

「いえ、桐原さんは処理だけで結構。これから話す内容は私の業務外です。」

「そして内容は私の作ったおとぎ話だとお考えください。」

使者は桐原が本来知りえない事、そしてあり得ないことを話すということだ。

「名前は森川武 年齢は42歳 身長は170程度でしょう」

「系統は火・大気が基本です。ですがあの師ですから油断はできません」

使者はここまでは本来伝えられるべき内容であるといい加えた。

「さて問題は魔術以外に彼は神秘の術式、術具を使用します」

一呼吸おいて話を続ける。

「正教会の人間なのか？よくもまあ……」

桐原は飽きた。もし素状がばれば即処理される。

殺害されるだでないが下手をしたら生きたまま神秘研究用の実験台だ。

「その戦闘能力ですが、本部地下禁忌保管書庫に単独で侵入」

「侵入の際、禁忌警備の魔術士を合計23人殺害」

「その後、多重結界が施されている防壁を破壊し逃亡しました」

使者は先ほどまで正座していた足をあぐらに崩した。

「まあざっとこんなもんです。十分におとぎ話でしょう？」

「そうそうアクレス魔導士も殺害されています。あっという間にで

す」

使者は忘れていたと言わんばかりに付けたした。

桐原は咄然とした。森川という名前は聞いた事がある。

入門は遅かったが、天性の素質と努力で兄弟子達をあっという間に抜きさった。

たしかアクレス爺さんの秘蔵っ子だったはずだ。

さらに驚くべきは魔術士を禁忌へ侵入する僅かな時間で殺害している点だ。

戦闘特性と術式の使い分け、さらに神秘や術具となると人間であっても異形種に

感じるほどだ。桐原も術具を使うが魔術士23人となると短時間では無理だろう。

「アクレス爺さんは行方不明って発表だったな」

「まあ禁忌侵入され、逃げられたのが教会関係者だったなんて言えないよな」

桐原はすでに戦闘のシュミレーションを開始していた。

そんな男が禁忌へ侵入し何かを持ちだした。その禁忌に対しても思慮しなければ

ならない。

「私がお話できるのはこれだけです。あと増援は近日中に到着するでしょう」

「この内容は二人の秘密ですよ？ 桐原さん」

使者は笑顔で忠告をする。

「わかった。それと禁忌から持ち出された物はなんだ？」

桐原は禁忌に侵入したとしか言わない使者に対しストレートに聞く。

「さあそれは存じません。私だってこの秘密をお話しただけで危ういですよ」

使者はそんな危機感を感じさせず答えた。

「俺の仕事は森川を処理するだけでいいという事だな」

桐原はそういつて話を切り上げた。

最後にと使者が靴べらを使いながら話す。

「被害者は元軍部それも異能者関係だという事です。それと」

「森川と特定できたのは軍情報部から提供された資料と防犯カメラに」

「映っていた人物と一致したからです。だから早くこれたのですよ」

使者はドアを開け姿を消した。次に会うのは桐原が生きて任務を達成した時だ。

桐原は使者の言葉にあつた軍とい単語について考える。

軍が情報提供するのには裏がある。当たり前的事だ。だれもただで物を提供する

奴はいない。しかもそれが組織や国家となれば尚の事である。

国家機関は起きた状況を最大限に利用する。

それを考えればこの事態を利用しないわけではない。それには何処かのタイミングで

介入してくる可能性は大きかった。

森川武は禁忌から何かを持ちだしている。

応援が来ると言っていたがそれは桐原が森川武を処理してからのが

の部隊だろう。

禁忌は多種に及ぶ、桐原は本部にいた時間は1年もない。

それは桐原自身の卓越した戦闘能力と術式は学ぶのではなく編み出す物だとい

信念からであつた。

協会本部にいれば過去から現代まで培われた術式を学べるがそれはあくまで探求用にしかない。桐原はそれが嫌で本部を出て担当者になった。

それからというもの時には人を殺め、そして人を守ってきた。

桐原にとって正義とは普遍のものではない。色をかえ形を変える。魔術協会に在籍しているのは半ば惰性である。

どの組織でもどんな思想でも桐原にはあくまで枠組みでしかないのである。

桐原はコートを羽織り、テーブルに置いてあつた資料から顔写真を取り出す。

その決意に溢れた表情と鋭い眼差しを脳裏に焼き付け内ポケットへしまう。

ドアの方に体をひるがえすとコートからは金属がぶつかりあう音が聞こえた。

どんな相手でも負ける訳にはいかない。そう決意し陽が沈む街へを向かう。

贖罪への階段 第6話（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。

連載2本しておりますが

1本目の息抜きで書き始めた

贖罪への階段。名前から設定まで

その場の勢い・・・

よろしければ励ましてください。

贖罪への階段 第7話（前書き）

この物語はグロテスクな表現や残酷な描写を含みます。

苦手な方は、注意してください。

贖罪への階段 第7話

陽は傾きすでに夜がとばりを降ろしていた。

建設途中で放棄されたこの建物には窓はなくコンクリート製の積み木に

見える。7階まで建設された建物にライダースジャケットを着込んだ男が

真つすぐ入っていく。廃墟に立ちいるのになんの躊躇もない。表情は無く、指定された目標を排除すべく建物の暗闇に消えた。

建物は郊外の第三セクター外れにある。

回りは空き地で人の往来は昼まですらない。今その建物と空き地を見下ろす道路に

一台のバンが停車していた。バンは旧式だが車内には様々なモニターとルーフ部分には

高性能複合カメラが建物を狙っていた。

車内には機器を操作する男が四名、ドライバーが一名待機しており服装はそれぞれ

バラバラだが、脇や腰には銃器を携行していた。

彼らは軍情報部である。

彼らはこれから起きる事象を出来るだけ詳細に観測し終了後、迅速に撤収しなければ
ならない。

「256 内部情報を報告せよ 繰り返す 内部情報を報告せよ」

バンのオペレーターが先程建物へ消えた異能者に報告を促す。

「256から報告。対象は未だ発見できず　これから3階へと向かう」

感情のない声が聞こえた。

マイクを抑えオペレータが愚痴をこぼす。

「異能者ってのはどうして好きになれないな」

バンの中のは一同頷く。

異能者は大きく二つに分類される。

自発的に能力が開花したものと科学的に能力を引き出されたものだ。前者であれば感情も精神的にも通常の人間と変わらないが。

後者の場合、薬物の後遺症や脳の外科的手術により人工的に感情が削除される。

軍で雇用している異能者の多くは後者である。自発的に開花した者は第一種と

呼ばれ指揮命令系統を担当する場合が多い。

後者の科学的に開花したものはプロデクションと呼ぶ。

第一種が指揮し駒として第三種が戦闘を行う。第一種の中には積極的に前線へでる者も稀にはいるが殆どは部隊長として活動をする。

森川は異変を感知した。

眠っていても感知結界が異常を知らせれば覚醒する。

追われている者の独特の習性だ。

素早く術具を掴み　下の階へと降りる。

魔力は感じない。ただの浮浪者かそれとも異能者かである。

先日、異能者関係の軍人を殺害している。

軍が先手を打ってくる事は考えられたが、ここまで迅速にねぐらが見つかるとは

予想外だった。森川は侵入者が敵が見分けるために大胆な行動にでる。

素早く階段を駆け降り、4階で息を潜める。

4階であれば不利になった時でも飛び降り術式で落下のダメージを相殺できるからだ。

異能者だった場合を考慮し、大気を圧縮し指向性を持たせ対象にぶつける術式を詠唱する。

森川の左手には空気が渦を巻き圧縮を開始する。

それまでなかった風が大気を圧縮している為に左手に向かって風を作り出す。

裸の階段から男がゆっくり上がってくる。暗闇でもわかる。

男の目は死んでいる。ただ目標を探し、破壊する。楽しみもなく悲しみもない。

森川は異能者だと断定した。

相手が異能者であれば先手を取らなければ不利になる。

森川は柱の陰から飛び出し先ほどの術式を発動させる。

大気は轟音をあげてバレーボール程の塊が、弾丸の速度で異能者を貫く。

はずだった。

異能者が左手をかざしただけで空気の弾丸は轟音と埃を巻き上げ消失した。

命中したはずだ。森川はそう思った。
だが舞い上がる埃と砂煙で異能者は見えない。

突如、砂煙が見えざる力によって払われる。大きな団扇で払うように煙は四散した。

異能者は健在だった。森川に手をかざして握り潰すような仕草をする。

森川は咄嗟にコンクリートの柱へ飛ぶ。

直後、轟音と共に森川が先程まで背にしていた柱が圧縮されたかの様に崩れる。

森川は改めて異能者の恐ろしさを痛感する。

各国軍部が異能者をこぞって雇用、開発するのも頷ける。

異能者の攻撃は予備動作が短く、目に見える物は少ないはない。

対魔力結界では止められず、物理防御用結界でも紙を破くように破壊する。

異形種の脅威にさらされる人類は、異形種が生まれながらもつ対魔力結界に

手を焼いていた。魔術や神秘ではその皮膚のように張り巡らされた異形種の結界の

為に威力を激減させる。その点異能者は異形種の肉体的強度を破壊すればよいのだ。

森川はすぐさま次の柱へと跳躍する。

こうなつては一ヶ所にいれば柱ごと潰されるからである。

異能者は今度は平手打ちのような動作をする。

一瞬先に次の柱へ移動した森川の目に飛び込んだのは柱が特大ハンマーで横殴りされた様な状況だった。

異能者はゆっくりと歩きだす。もう一度左手を握り潰すような動作森川は飛び出すと同時に術具を投擲する。

森川の横で柱が圧縮されて崩れる。

投げられた術具は空気を裂きながら異能者へ向かう。

異能者は動作を解除し左手を体の前にかざす。

「キンッ！」

何かに弾かれ術具は異能者の前へと落下する。

森川は異能者の側面へ移動していた。

そして先ほど防がれた大気の術式を発動する。そして同時に異能者へむけ突進する。

空気の弾丸が右側面から異能者へ放たれる。

異能者は体を右にひねり左手をかざす。

轟音と砂煙が異能者を包み込む。弾丸の速度で飛来する術式をかうじて防ぐ。

視界はゼロになった。素早く砂煙払う為に左を振るう。視界が晴れた時決着はついた。

森川はすでに異能者の後ろに回っていた。

左手は異能者の能力である。左手を掴み、右手は背中に添えられていた。

異能者に焦りは無い。森川に慈悲は無い。

短い発動の言葉を囁き、異能者の体には空氣の弾丸で開けられた大穴があく。

血は霧のように異能者の前方へ四散し、倒れこむ。

森川は素早く右手で首の後ろを掴み、コンクリートへ叩きつける。同時に左ひざで異能者の左手を抑え、右手の力を最大限込める。鈍い音がし、首骨が折れる。

折れてからも森川はしばらく動かなかった。完全に生命活動の停止を確認し、ようやく体を上げる。人工的な眼球が異能者からこぼれ落ちた。

額の汗を拭う。勝てたのは運であった。

森川は異能者は左手でしか能力を発動できないと賭けたのである。術具で正面に手を移動させ、さらに右側面からもう一度陽動を掛ける。

舞い上がった砂煙で視界を塞ぎ、後ろをとる。

異能者が右手やその他の能力を持って肉塊になっていただろう。

森川は術具を拾うと素早く4階から飛び降りた。

着地の前に大氣の術式の一つを発動させ、衝撃を吸収する。

建物のすぐ傍を流れる運河沿いに街の方へ走り去った。

建物を見下ろすバンの中には感嘆の声が上がっていた。

256は左手しか能力が発動しないのをすぐに見抜き対処したあの

男に対してである。

256の片眼球は人工的に作られた観測用の義眼である。一応視神経とは結合されているが、本来の眼球ほどの視力はない。あくまで観測用なのである。

この一連の戦闘映像とデータはすぐさま情報部へ送られた。

「しかし、思った以上ですね。彼は……」

少佐の階級を付けた男が言う。

イージス艦の戦闘指揮所が引越してきたかのような部屋で先ほどの戦闘を観戦していた。

「これぐらいデータが取れないと割が合わんよ」

以前、防衛庁の会議室で中央に陣取っていた責任者である。

「魔術協会や正教会とは表だって殺し合いはできないからな」

「今回の彼は好都合だよ。一つの要素以外はね」

男はデスクに置いてあった軍帽を被る。

「彼の狙いが我々だという事ですな」

少佐がすこし緊張した顔で言う。

「少佐。君は間違っている。我々は殺されて当たり前なのだよ」

男は笑顔で答えた。

「どういうことですか？異形種にでありますか？」

少佐は男を見つめる。男が少佐を視線をあわせた。

「我々は多くを殺し利用している。異形種ではなく人間をだ」

「しかも国として守るべき人々だ。わかるかね？少佐」

男は少佐を睨む。

「我々はあの男に殺されるとおっしゃるのですか？」

少佐は慌てて目をそらす、男の目は恐ろしかった。

「そうではない。我々は狙われて当たり前なのだという事だ。」

「脅える前に対処すればよい事だ。事前にわかっているのだから」

男はカップを手にし口へ運ぶ。

「わかりかねます。自分は国を守る為に全力を尽くしております」

少佐は前を向き姿勢を正す。

「まあいい 少佐、君に異能者の警護を1名付けるとしよう」

男は資料を少佐へ渡す。だが少佐の顔は見えてはいない。

先日、習志野へ呼んだ2名の内1名である。

「光栄であります。」

少佐は敬礼をし資料を受け取る。すこし不安が取れたようだった。

「しばらく森川は泳がせろ。これは命令だ。」

男はカップを置き、少佐を退室させる。

受話機を取り、情報部へと繋ぐ

要件を伝えたと静かに切った。

目を閉じる

先程戦死した異能者とこれから死ぬであろう者の為に黙祷を捧げた。

贖罪への階段 第7話（後書き）

ここまでお読み下さった方ありがとうございます。

ホラー短編・恋愛連載もしておりますので
よろしければそちらもご覧ください。

感想をお待ちしております。 励みがほしい・・・

贖罪への階段 第8話（前書き）

グロテスクな表現や

残酷な描写があることがあります。

ご注意ください。今回はないけど

贖罪への階段 第8話

森川は川沿いに街へと向かう

先程の襲撃は辛うじて退けただが、予想よりも早い軍部の介入に予定日程を繰り上げる必要性を感じていた。

まずは街で情報を集めなければならない。

それは標的の行動予定である。幸いこの国は一部機関を除いて情報管理に疎い。

ある程度金銭を積みれば政府高官の予定など半日も経たない間に集めることができる。

街の明かりが多くなってきた辺りで運河沿いから

比較的狭い道路を選んで街の裏路地へと向かう。

裏路地は売春婦やそれを管理する外側の人間達の

テリトリーである。女の目は虚ろで誰もが虚無を見つめている。

それを品定めする男達は見下すような視線で商売品を舐める様に見える。

森川はそんな廃退した路地を歩きながら考えた。

ここは異形の住む向こうの世界と大差ないのではないかと思っていた。

目的のバーはその吐き溜めの中にあつた。

階段を下り、ネズミを蹴飛ばすドアの前の電飾は消えている。構わずドアを開ける。

薄暗い店内にはこの辺りでは珍しい良いスーツを着た客と顔に傷

のあるマスターだけだ。

カウンターの端へと腰を降ろす。

マスターは注文を聞き酒を注ぎ始めた。森川がグラスに口を付ける。するとスーツの男は、カウンターに勘定を置き店を後にする。

森川はその客が店を出るのを確認してから

マスターに金を渡す。紙幣は輪ゴムで止めてあり遠目にみても数十万はあると思えた。

マスターはなにも言わず紙幣を胸のポケットにしまつとカウンターの下から2枚の封筒を森川に渡す。

森川は片方の封筒を開け中を確認する。そしてもう一枚も同じように確認し、マスターに声を掛けた。

「随分と早かつたな。今日2人共わかるとは」

森川はさらに続ける。

「しかし金は一人分しか払っていないが？」

そう森川が渡した紙幣はあれでも一人分なのである

「近頃は情報が早くなって値段も下げましたよ」

マスターはそう理由を説明した。

「金はまた今度持つてくる付けにしといてくれ」

森川はマスターに礼を言い店を後にする

マスターは軽く返事をしてグラスを磨く。森川は今後の予定を変える為、第二の拠点へ向かう

ここに来る時よりもさらに慎重に別のルートで戻る事にした。

森川はダウンジャケットのフードを被りながら考えていた。

これは不自然である。そう森川の脳が警報を鳴らす粗方、故意にリークされた情報であろう。

だが、森川に選択の余地はない。

向こうが餌を吊るすのであれば針ごと呑みこむまでだそう言い聞かせ足を速める。

桐原は森川と同じネオン街にいた。

もし森川が情報や物資を集めるにはこの街にはここしかあり得ない。

ネオンが光りその陰にはゴミが散らばる。

ここではゴミを片付けるのではなくその暗がりへ押しこむだけだ。

何件かの裏事情通に聞いて回ったが足取りは掴めなかった。

最後の一件を回り、後は立ち寄りそんな廃墟を調べるつもりだった。

桐原の前から男が歩いてくる。

このネオン街に似合わない軍の制服姿であった。礼帽を深めに被り、

桐原へ真つすぐ向かってくる。

人が通れば、声を掛ける呼子達も制服姿の場違いさに視線を送るだけだった。

異様なのは場違いな制服だけではない。

顔は平穏だが、触れれば傷を負うカミソリのような雰囲気だからかもしれない。

桐原は路上の中央へ移動し男を見据える。桐原に男が近寄る頃には周囲から皆が消えていた。

「桐原さんですね。私は安曇吉昭と申します」

男は丁寧にあやうをして、礼帽を脱ぎ髪を直す

「ご覧の通り軍人です。階級は准将です」

桐原に握手を求めてくる。

桐原は安曇と名乗る男の差し出した手を握る。目は相手から逸らさない。

安曇の歳は30後半だろう。精悍な顔立ちで体格も良い。その若さで准将であればかなりの切れ者だろう。

「それで、安曇准将がどのようなご用件で私に？」

軍の情報網は伊達ではない。国家予算を使いさらに裏の予算も惜しげもなく使う。

力技もいとわない。相手にしたくない連中だ。

「そうですね 歩きながらお話ししよう」

安曇は礼帽をかぶり直すと大道り方面へ歩き出す。

桐原は一瞬迷ったが軍と事を構えても得にはならないと判断し、相手の誘いに乗ることにする。

相手が桐原の力を使うのであれば、こちらも利用するまでだ。

二人は大道りに出る。交通量は少なく、人道りはネオン街より少ない。

「単刀直入に述べます。そちらがお探しの森川なる人物の情報です」
安曇は前を向いたまま話す。

「近々、森川は我々の撒いた餌に食いつくでしょう」

「ですからその時、貴方に森川を処理して頂きたいと言う訳です」

その安曇の提案は桐原にとっては悪い話ではない。

「森川一人に随分と贅沢な事ですね。そちらで森川を処理してはいかがですか？」

桐原は軍が情報を持って居ながら森川を処理しない理由が分からなかった。

「そうしても良いのですがね。それでは協会との関係がこじれます」
「軍としては協会と良好な関係を保って行きたいのですよ。桐原さん」

安曇はあくまで協会のメンツの為だと言い切る。

「戦闘に際して我々は、関与しません。誘いこむ餌は提供しますけどね」

「民間人の避難、誘導等は此方で手配します。不測の事態の事も心配なく」

笑顔で安曇は桐原が死んでも問題はないという旨を伝える。

「わかりました。連絡を待っていますよ 安曇准将」

桐原は安曇の真意がわからなかった。

「日時が決まりましたらご連絡します。それと貴方の協会からの増援は来ません」

「これは軍と協会との決定事項です。ご了承ください」

安曇は丁寧な口調で桐原一人で戦えと言っているのだ。

桐原は動じない。元より増援なぞ期待もしていなかった。

軍の狙いはわからない。ただ利益を得ようとしているのではないだろうと感じた

それは軍の行動理念とは異なる。だがこの安曇という男が利益以外の何かを企んでいる事は感じ取れた。

安曇の前に高級車が止まる。

運転手が足早に後部座席のドアを開ける。

安曇は乗り込む際、一言付け加えた。

「桐原さん 決行日は私も現場には行きますよ」

安曇は窓から敬礼をし去っていった。

桐原は当日まで無駄に探す手間が省けた事を素直に喜んだ。

後はただ闘いの準備をするだけだからだ。

軍は森川の居場所さえ掴んでいるだろう。安曇という男は不可解だった。だからこそ

今は流れに乗るしかない。考えられる限りのケースを想定し、最悪の場合は軍を敵に回す

事にもなるだろうと桐原は覚悟を決めた。

贖罪への階段 第8話（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます

最低でも一日1話は更新したいものです。

読んでいる人いるのかな？と思ったり。

贖罪への階段 第9話（前書き）

遅くなりました。
すいません

贖罪への階段 第9話

滑走路から大型の旅客機がひっきりなしに飛び立っていく。到着ロビーは友人、恋人、家族待つ人々で混雑をしていた。再会の挨拶や抱擁が空間を埋め尽くしていた。その空間を一人の女性が進んでいく。

女性は長いブロンドの髪をなびかせ、空港出口へ向かう。通り過ぎるその女性の美しさにすれ違う男性は目を奪われた。年の頃は、30歳を過ぎているだろう。しかし女性の美しさは衰えることは無くむしろ女として成熟した色気を醸し出していた。

空港出口からタクシーを拾い、街へと向かう。運転手に行き先を指示し目を閉じる。

ドライバーは女性の美しさと流暢な日本後に一瞬戸惑った。慌てて前を向き車を発進させる。

女の名前はミレンダ・ケストル。本部直属の魔術士である。森川の処理の為、送られるはずだった部隊の一人だ。

ただ出発直前に中止の命令をうけ、本来であれば本部に戻るはずであった。

しかし女は独断でしかも一人でこの国へ来たのである。

ミレンダにはどうしても確認しなければならない事があった。

それは彼女本人の疑問であり、恨みでもある。

ミレンダと森川は同門であった。森川が入門したときミレンダは18歳

しかしミレンダのほうが兄弟子にあたる。魔術士として幼い頃から

教育され

ていた彼女と30歳をすぎ入門してきた森川では格が違っていた。

入門後、森川は努力を惜しまず、そして誰よりも学んだ。

年下であるミレンダにも教えを乞いに何度も足を運んでいた。

そんな森川が他の家系だけでぬくぬく育った兄弟子達を追い抜くのをさほど時間が掛らなかった。

ミレンダはそんな温室育ちの同輩より、必死に学び着実に進歩していく

森川に好意を持っていた。二人で術式を学び応用して腕を競った。そんな森川に女性として恋心を抱きそれに森川も答えていた。二人は恋人として、そしてライバルであった。

ある日、二人は本部から離れた高級ホテルで食事をしていた。

普段は安いレストランなのだがこの日だけは森川の意向でドレスアップをし

夜を共に過ごした。ミレンダは正直な気持ち魔術士を捨て森川と家庭をもちたいとも当時思っていたのである。

朝、目を覚ますとそこには森川の姿はなく、テーブルに別れの言葉のメモ

だけであった。ミレンダは混乱と失意の中、本部宿舎へと戻った。そこで耳にしたのは信じられない内容であった。

本部を破壊し禁忌を奪われたという事とその犯人の名前が森川だった。

当時のミランダは混乱した。森川が師を殺し仲間の魔術士を23

人も

殺害、禁忌に侵入し本部を破壊して逃亡したのである。

当然、恋人関係であったミランダにも厳しい取り調べが行われた。だがミランダが話した内容はごく自然な内容であり裏もとれていた。

程なくミランダは解放され日常に戻った。だが愛する者に裏切られ捨てられた彼女のプライドはズタズタであった。

そしてミランダは本部での生活を捨て異端者を追う部隊へと志願する。

その後森川の消息はまったく掴めなかった。ミランダは異端者狩りを機械の様にこなしながら森川の足取りを追っていた。

そしてやつと日本のこの街にいと本部への連絡があったのだ。

森川を処理する為、部隊が組まれミランダもその一人であった。

だが突然の中止、ミランダには本部の命令を無視しても森川にあらう理由があったのである。

ミランダは車窓から流れる景色だけを見ながら考えた。

それは長年、繰り返し考えてきた疑問である。

どうして自分を連れていかなかったのか。

どんな道でもミランダは森川と一緒に歩きたかったのである。

たとえそれが茨の道でもミランダは一緒に歩みたかった。

空港からの高速道路降り、街の中心部へと向かう。

タクシーは街でもひと際大きい高層ホテルの玄関でとまった。

ミランダは料金を払いホテルへと入っていく。

森川はその頃、あるビルの屋上にいた。

ビルは街の中心にほど近かったが老朽化の為、入っているテナントは少なかった。

12階建ての屋上。フェンスはなく屋上の淵が一段高くなっているだけだ。

森川はその淵に腰を下ろす。書類を取り出し今後の予定をたてる。

自分は泳がされている。

そう森川は確信していた。異能者の襲撃、情報をすんなりと手に入れられ

た事。軍部が何故、森川を自由に行動させているのか理由はわからなかった。

だが、森川はそこにこそ付け込む隙があるのではないかと思案を巡らせる。

まずは警備が薄くなる時間を探し出す、そしてある項目に注目する。

習志野駐屯地からこの街の郊外にある研究所に向かうタイミングに目を付ける。

情報には移動する車の登録番号、車種、ナンバーと警護の内容まで記載してあった。

警護の欄には「452」というナンバーリングしが記載されている。

森川はその数字が異能者の登録番号である事を理解していた。

この前の異能者との戦闘を思い出す。

異能者は脅威だ。だが森川は警護が薄くなるそのタイミングでの決行を決めた。

警護を排除するのには時間をかけれない。速やかに対象を殺害し、その場から去らねばならない。

だが、森川は自分自身の能力の限界を把握していた。

今の能力では限界が見えているのである。刺し違えでは許されない。

森川の頭に禁忌の書物の存在が浮かぶ。

それは魔術士協会から盗み出し、未だ使用していない禁忌である。

「使う時がきたんだな……」

森川は空を仰ぎながら呟く。

森川はその禁忌を使用する準備の為にビルを後にする。

人間として災厄をまき散らすだけの存在になるのを覚悟して……………

贖罪への階段 第9話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

更新が遅れ申し訳ありません。

贖罪への階段 第10話（前書き）

グロテスクな表現がある場合があります。
苦手な方はご注意ください。

贖罪への階段 第10話

郊外と街を繋ぐ高速道路を黒塗りの乗用車が走っていた。

車中には少佐の階級を付けた人物と助手席には名前はなくただの番号で

呼ばれる異能者の警護が一名、ドライバーが一名の計3名が乗車している。

「田中少佐、お加減でも悪いのですか？」

ドライバーの下士官がバックミラー越しに問いかける。

「いや……ちょっと疲れていてな。気にしないでくれ……」

田中少佐は、ミラーを使い助手席の様子を見る。

助手席の男はまったくの無表情でただ前だけを見つめていた。

田中はこの番号だけの存在が気に入らなかった。

自分の警護の為に付けられた異能者ではあったが、何を考えているのか

まったくわからない点が田中の神経を疲労させていた。

情報部で森川への24時間体制での監視が行われているのだが、安雲准将からの命令で処理は行われていない。

田中には何故、森川を泳がせているのか皆目見当がつかなかった。

上官の命令である。目的は不明でも田中は従うしかなかった。

トンネルの前に差ししかかった時、今まで流れていた車が詰まり始めていた。

「この時間に混むのは珍しいですね」

ドライバーがゆっくりブレーキを踏みながら呟いた。

田中を載せた車はトンネルへとゆっくり入っていく。

トンネルの中はすでに渋滞が発生しており、歩いたているのと変わらない速度で進んでいった。いずれ停車するのは明らかだった。

田中はオレンジ色の照明を眺めながらドライバーに言葉を掛ける。

「気にするな。別に時間はある……」

そいつって前方を見た。

田中はとドライバーは停車している車の列を何かが逆走してくるのを目にした。

それは人であり、皆何かかあら逃れようと懸命に走ってくる。

ある者は後続車に戻れとジェスチャーとし、また別の者は子供を抱えて詰まり始めて

いる車の列を縫うように走っていく。

「火災でも………起き……」

田中が前方を確認しようとしたとき何かから逃れようとしているの一人が車の窓を叩いた。

「逃げる！！ 異形だ！ あんた等も早く！」

ドアを叩いた一般人はそれだけを言うと別の車へ退避を勧めに走って行った。

3名は車を降りる。

田中はドライバーに後続の一般人の避難を命じた。

トンネル内は風の流れる音と人々の走る音、そして悲鳴が響き渡っていた。

警護に前方への注意を命令し、田中は車のトランクを開ける。

そこには正式採用の自動小銃と弾薬や銃火器一式が積まれていた。

田中はそれを素早く装填し、防弾チョッキを着る。

田中は生粋の軍人である。国を異形種という驚異から守る為に尽力してきた。

だがその一方、異能者を増やす為の実験で守るべき国民を犠牲にしている。

その相反する行動理念を自覚していた。

だからこそ田中はそこから退避する事はできなかった。

なんの能力を持たなくとも一般人を守らなければならない。

そう決心し、トランクを閉める。

前方を見つめる警護の異能者。

名前はなく、ただ番号で475と呼ばれる男は田中の命令を忠実に実行していた。

「良し……今から前方から来る異形種を食い止める。いいな？ 決

して引くな」

田中は斜めに止まった車を盾にし、自動小銃の標準を覗きこむ。

475は田中よりやや前方で無人となった一般車両の屋根へと昇り前方を警戒する。

前方からは既に無人だろう。田中は小銃の安全装置を外す。

「あまりうるちよろするなよ……俺の前にでないでくれ」

475に注意をしておく。

車のエンジン音と風の流れる音だけが響くトンネルに身の毛もよだつ雄たけびが響く。

それは異形種の奏でる狩りの声であり、その声は大きくそして数を増やしながら

田中達がいる場所へと近づいてきていた。

トンネル内に止まっている車の屋根を素早い移動で異形種がやってくる。

それは単独ではなく飢えた野獣そのものであった。

狼のような顔つきに長く伸びた手、足は異様なほど発達していた。

額から汗が滴る。異形種は多種多様に存在している。

田中自身も過去、捕えた異形種を見てきたが今目の前に迫って来ている生物は

見たことは無かった。

「発砲を合図とする。その後は自由に迎撃しろ！　こちらを気にする必要はない」

田中はそう命令し、腰を上げて構える。

異形の数はいくつか、現用武器の効果が薄いのは知っているが足止めにもなればと射撃を始める。

3点バーストで先頭の異形種を狙う。

小刻みな発射音と薄暗いトンネルを照らす火花が散る。

先頭の頭部に命中し、異形種はのけ反り転倒した。絶え間なく引き金を引く。右へ左へ跳躍する異形めがけ鋼鉄で弾頭補強された銃弾が飛んだ。外れた弾丸がトンネルの内壁で火花を散らす。

475は田中の射撃と同時に異形へと走り出していた。やり投げのモーションで何かを投げつける。20メートルまで迫っていた1体の異形に穴があく。その穴は一つではなく何本もの見えない槍に貫かれたようだった。

貫かれた異形は血液と雄たけびをまき散らしながら停車していた車へ激突した。

すかさず、田中の射撃で倒れた異形へ見えない槍をぶつける。銃弾の命中の衝撃から立ちあがりかけていた異形を車ごと貫いた。

田中は改めて異能者の能力に驚いていた。慌てて空になったマガジンを捨て再装填する。

今度は射撃モードをフルオートに変え、接近しつつある異形へ向け発射する。

トンネル内壁の天井に飛びついた1体が悲鳴をあげて落下する。

落下した一体へ対してありったけの銃弾を叩きこんだ。
路面のアスファルトが砕け、飛び散る。

だが異形は絶命はしない。命中箇所からは血液が微量にでている。

素早く立ち直り、覆いかぶさるように田中へと跳躍をする。
自動小銃を捨て、拳銃を連射した。異形の腹部へ命中するも時折火花を散らすだけだった。

異様な大きさの爪が田中の顔面を削りとりうとした。

田中が絶命を確信した時、その異形は見えない槍で貫かれ横に飛ばされる。

尻もちをついた状況から立ちあがり横をみると475が駆け寄ってきていた。

田中へ手を差し出し立たせる。

残りの異形は二人と距離を取り、雄たけびを上げながら動き回っている。

自動小銃を拾い、再装填し構えたまま後退を始める。

「475……下がるぞ！ 前方への注意怠るな！」

田中は命令し銃を構えたまま後退を始める。

475はいつでも投擲できるような構えのまま後に続く。
異形は先程とは違う叫び声をあげ、二人と相対距離を崩さずついて来ていた。

トンネルの入り口へと近づいた時、振り返った田中の目に人影が飛び込んでくる。

入り口から差し込む逆光の為、影しかわからないが微動だにしてい

ない。
田中は、異形へ威嚇射撃をしながら叫んだ。

「何をしている！ 早く退避しろ！」

前方へ銃撃をしながら警告を発した。

だがその影は事もあるうに退避するのではなく田中達の方へと進んでくる。

銃弾を使い果たし、自動小銃を捨てる。

田中は拳銃をホルスターから取り出しながら振り返った。

「…………お前は…………森川…………」

田中は愕然とした。

そこにいたのは田中の命を狙う森川武の姿であったからだ。

素早く森川へ向け拳銃を向ける。

森川がいかに優秀でも所詮人間である。拳銃の銃弾が当たれば死ぬ。

田中が拳銃の引き金を引くより早く森川の口が何かを呟いた。
トンネルに銃声が響く、田中は森川に命中したと確信していた。

だが銃弾は森川に命中せず、代わりに何かが落下した音がした。

それは田中の右腕そのものだった。

右腕を瞬時に切断された田中はバランスを崩し倒れ込んだ。感覚はなく、ただ何かが流れ出る感触だけを残していた。

異変に気が付いた475が駆け寄る。森川に向け見えない槍を投げつける。

森川は慌てる様子もなく片足をあげ地面をその足で踏みしめる。その瞬間、地面から醜い巨大な異形が姿を現す。

見えない槍はその異形に刺さり鮮血をほとばしらせる。

異形は大きな叫びをあげ前のめりに倒れた。

その後ろには無傷の森川が立っていた。

田中は確信した。この異形達を呼び出し、使役していたのは森川武だと

徐々に痛みが戻ってくる。

出血の為、遠のく意識を必死に繋ぎとめていた。

森川の後ろにはすでに別の異形が何体が現れていた。

うずくまる田中の前に475がかばうように立つ。

田中達の後方からは先程の異形達の叫び声も近づいてくる。

「……47……5……撤退しろ……」

田中は異能者へ退避を命令する。

しかし475は微動だにしなかった。田中は戻ってきた痛みで顔

を歪める。

「その異能者……退けさもなくば殺す」

森川はゆっくり歩きながら475へ最終勧告を告げる。

475は田中の前から移動しようとはしなかった。ゆっくり投擲をする構えをする。

「田中少佐……貴方にお聞きしたい事がある」

475が攻撃モーションに入っている事を気にせず森川が言葉を続ける。

「貴方はご自分の犯してきた罪を認識なさっていますか？」

「人々を実験の材料とし、無数の命をその手で終わらしてきた事を……」

森川は475の無表情な顔を一瞥し悲しい表情をする。

「見てごらんなさい……実験の結果、異能者を作り出してももはや人ではない……」

「人としての感情や心を失ってただの兵器としてしか生きる道がないこの者を」

大きくため息をつき、森川は歩みを止めた。

「……罪？ 我々がやらねば誰が守れるというのだ……この国を……」

痛みと出血に耐えながら田中は顔を上げる。

「必要なだよ！ 時間も手段も我々に選ぶ余地はない！」

痛みのはけ口としてとなり声を上げる。

「……お前なんぞ……何も手助けをしない神とやらを信仰していただろう……」

田中は吐き捨てるように過去正教会にいた森川へ怒りをぶつける。

森川は自分の周りにいる異形達を見まわして田中を見据える。

「それは過去だ……少佐……己が犯した罪は贖罪しなければなら
ない……」

「あの日、研究所でなにが起きたか聞かせてもらおうか……」

森川はそういつと再び歩き出そうとした。

その瞬間、田中の前で攻撃モーシヨンだった475は投擲姿勢を解
除し田中へと

振り返る。そしてゆっくりと右手を上げた。

「475……？」

それが田中の最後の言葉だった。

森川は素早く詠唱を開始し、475へと雷撃の術式を放つ。
だが475が振り下ろす異能の見えざる槍が田中の頭部を貫いた。

轟音を上げて青白い光が475に吸い込まれた。

475は体中の穴から煙を吹き出しだし絶命する。
自ら手を下した田中へ覆いかぶさるように倒れていった。

森川は自分の詰めของ甘さを痛感していた。

田中少佐からしるべき真相を聞き出す前に殺されてしまったからだ。
あの異能者は自発型の能力者ではないはずだった。

表情をみればわかる。命令を実行するだけの兵器である。

それが警護対象を自ら殺害するとは考えられなかった。

予め対象の殺害は命令の中に含まれていたのだろう。

田中少佐への保険は実行されたのである。

森川は二人の死体に背を向けトンネルを後にする。

異形達もその後続いた。この世のものとは思えぬ叫びをあげながら……

贖罪への階段 第10話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

更新ペースが遅れ申し訳ありません。

贖罪への階段 第11話（前書き）

この物語はグロテスクな表現や
残酷な場面がありますのでご注意ください。

今回はないですけど。

贖罪への階段 第11話

安雲は湾岸高速道路トンネルで起きた異形種出現の一報を
防衛省地下3階にある指令室で聞いた。

腕時計に目をやる。時刻は13時を回っていた。
この時刻であればその付近を田中少佐が乗った車が通る頃だ。

速やかに該当地域への部隊の展開、近隣住民の避難指示を出す。
鎮圧部隊が到着する頃には、全て終わっているはずだと心の中で呟く。

安雲は森川に田中少佐及び唐津博士の行動予定が伝わるように情報
部を
使い手回しをしていた。

森川武の行動は一つを除いて概ね予想どおりであった。

その一つとは森川が襲撃手段として異形種を召喚した事である。
確証は掴めないが森川武は異形種を召喚し、それを使役できる術式を
手に入れていると安雲は考えた。

高速道路上に設置してある監視カメラの制止映像には異形種と
それと行動を共にする森川武の姿があった。

人類が異形種を使役する姿を始めてみた安雲は当初の予定を変更
せざるをえないと判断した。

「トンネル内の生存者救出を第一要件とする」

「田中少佐及び475の安否確認も急げ」

安雲は指示を出しながら電話をかける。相手は桐原である。

何回かのコールのあと桐原は電話に出た。

「桐原さん、お忙しい所すいませんが安雲です」

「……少々、事情が変わりました。お時間頂けませんか？」

安雲は丁寧な言葉で桐原に面会を求めた。

「……事情といたしますと？ 森川の件ですか？」

桐原は森川が動いたのだと確信をした。

「ええ……その通りですが、あつてお話しておきたい事がありますので……」

「申し訳ありませんが防衛省までお越しただけませんか？ もちろん迎えを出します」

安雲はトンネル内に突入していく鎮圧部隊の映像を見ながら言った。

桐原は安雲の真意がわからなかった。安雲が森川武を利用し何かを企んでいる事は

明白であった。ただ、安雲の最終目標と何故森川が軍部に敵対しているのかそれが謎である。

防衛省まで来いというからには安雲は自分にある程度の情報を渡すつもりだろう。

「わかりました。でわお言葉に甘えて迎えを待たせて頂きます」

桐原は安雲の誘いを受けることにした。情報が少なすぎるからである。

「ありがとうございます。1時間半程度でそちらに迎えがいきますので」

そついつて安雲は電話を切った。

鎮圧部隊からの情報が指令室に響く。

「……トンネル……内には……車両と多数の死者を確認し……」

ノイズ混じりで聞き取りにくいが多数の犠牲者がたようだった。

程なくして田中少佐と475の死亡が確認された。

安雲は彼らの遺体の状況を細かく調べさせる。

特に田中少佐の遺体の状況次第で森川に情報が漏れたかどうかを確認する為であった。

「そうか……よくわかった報告御苦労。引き続き周辺の捜索をしてくれ」

安雲は田中少佐の状態を確認し、周辺の捜索及び犠牲者の遺体回収の指示を出す。幸い周辺には異形種の姿はなく森川と共に既にその場を後にした模様であった。

安雲は森川を見失ったわけではない。既に追跡は行っており場所も特定していた

この場では安雲はそれを他の部下達に知られるわけにはいかなかったのである。

田中少佐の遺体状況からして475が安雲の命令を実行した事を確信した。

安雲は森川と遭遇した場合、可能な限り警護し森川に田中少佐の身柄が渡ると判断した

時点で475には田中少佐を処理するように命令をしていた。

森川の復讐心を満足させてはいけない。かゆい所に手が届いてはいけないのである。

彼が知りたいであろう事の全てを知られてはまだならなかった。

その為の情報漏えい阻止である。安雲の計画はまだ序盤なのだった。

安雲には手駒が多く必要であった。その為に桐原を防衛省まで呼ぶのである。

桐原を自分の意のままに動かす事は不可能だが、安雲の計画には必要な存在であった。

「すまないが来客の準備をしなければならない。事後処理は任せる」
「内閣執務室へ連絡しておいてくれ。会場周辺の警備には万全を期すとな」

田中少佐の代わりの新しい副官に後を任せ指令室を後にする。

安雲は廊下に出て帽子を被る。安雲が異能者開発に関わるようになったのは5年ほど

前からである。37歳の若さで准将まで上り詰め、国家プロジェクトであるこの事業の

責任者に任命されたのは偶然ではなく、彼自身の壮大な計画の一部であった。

その為に安雲自身も数多くの犠牲を顧みる事はなかった。時には自ら手を汚し

起きた事象は全て利用してきたのである。

廊下を歩きながら携帯を操作し、安雲の配下にある部隊へ連絡をする。

手短に用件を伝え電話を切る。

「さてと……真実を知る人間をもう一人用意しましょうかね」

それは桐原の事であった。安雲は廊下を歩き執務室へと向かう。森川が軍の人間を狙うのか、そしてこれから起きるであろう事を知っているのは

安雲吉昭ただ一人であった。

贖罪への階段 第11話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

贖罪への階段 第12話（前書き）

今回は特にありません。

贖罪への階段 第12話

桐原は携帯をガラステーブルに置いた。

煙草に火をつけ森川武による一連の事件を整理してみる。

事の発端はオフィス街での殺人事件であった。その事件の被害者は軍の人間であり、早々に森川武という人物の名前が浮上する。

森川は、過去に正教会に属していたが姿をくらましその後、身分を偽り魔術士協会で魔術の術式を会得する。

14年もの時間を費やし魔術を学んだ森川は、師を殺害し協会地下に存在する禁忌書庫へと侵入する。その際、警備の魔術士を23名殺害し

防壁を破壊して逃亡。

それから2年後、この街で森川は何をしようとしているのか。

それに安雲の行動には不審な点が多い。森川の所在をすでに把握して

いるにもかかわらず、魔術協会への建前として処理は魔術士である桐原に

一任すると言っている。

森川がそれまでの生活を全て捨てる理由があるはずである。

それには軍部が関わっており、それを安雲は知っているはずだと思

った。

安雲は何かを待っている。それが人なのかタイミングなのか森川を使い

別の事を成そうとしているように桐原は感じた。
行動を決定するに当たってはまだ情報が少ない。
自分がどう動き何を敵とするのか判断するには至らない。

煙草の灰が灰皿を逸れテーブルに落ちる。

現段階では安雲の提案を協会は受諾しており、安雲のプラン通りに動かなければならない。森川と相対する事を考えると正直、胸が躍った。

桐原は闘いが好きなわけではない。だが、老練な魔導士と23名の魔術士を倒した男と戦闘は男として興味があつたのだ。この矛盾する考えは桐原を悩ませていた。

自分自身の正義と信念は常に矛盾を抱えており、それは善悪の判断基準さえ狂わせる。

桐原は煙草がフィルター近くまで灰になつている事に気がついた。灰皿に押しつけ火を消す、自分がこれから行う事が善なのか悪なのかわからなかった。

チャイムが部屋に鳴り響く、思考の世界から桐原を呼び戻した。

桐原はソファを立ちあがりインターホンを取る。

「……私はミランダ・ケストルと申します。魔術士協会から来ました」

「森川武についてお伺いしたい事があります」

真が通った女性の声がインターホンから聞こえた。

桐原はその旨を了解し、部屋へと招き入れる。

ミランダと名乗る女性は丁寧な挨拶をし、部屋へと上がる。そしてソファに腰を降ろし急ぐ様に話題を切り出した。

「桐原さんもお存じだと思いますが、森川武の処理の為日本に来ました」

「すでにそちらの方で森川武の所在等の情報がありましたら私へお知らせ願いたい」

ミランダは桐原の目を真つすぐ見据え訴える様に言った。

「ミランダさん……協会は増援を出さないはずですが？」

「それとも協会は軍に内密で貴女を遣したのですか？」

桐原はミランダに情報を伝えるつもりはなかった。

そもそも増援は軍と協会の協議で中止になったはずだ。仮に内密でミランダを

派遣したとしても桐原に接触しては内密の意味をなさない。

協会が軍に内密で行動するとすれば桐原には接触せず行動するはずだからだ。

「……時間がないのです……彼を止めるには……」

ミランダは桐原の質問には答えなかった。ただ何かにすぐる様に言葉が続ける。

「私は協会の命令に背いてここに来ました。理由は貴方が知る必要

「はいはいです」

「森川武は私の手で処理します。これは譲れません……」

桐原は森川とミランダには何か因縁のような物があるような気がした。

それが憎しみなのかそれ以外なのかはわからない。

相反する感情がミランダを動かしているのではないかと感じ取れた。

「私は協会及び軍部から処理を一任されています。ですが……」
「貴女がどこで何をしようと私は関知しません。」

桐原は最大限の譲歩をする。これが精一杯である。

「ミランダさん、私は森川の情報を現在持っておりません」

「事情はご説明できませんが近々森川と接触する事にはなるでしょう」

桐原はミランダを説得するように話す。

「その時、私は貴女に連絡をします。その後、貴女が自分自身の考えで行動なさればいいでしょう」

「私が森川と戦う事は避けられません。貴女自身でその時どうするか判断して下さい」

桐原はミランダが森川武と話す機会を作ろうと思ったのである。

このマンションに来了時点で情報部からマークされるだろう。入国した

時点からされていてもおかしくはない。ミランダが下手な探りをいれれば

軍から障害として処理される可能性も否定はできなかった。

ミランダは必死に桐原の目を見つめていたが、やがて目を伏せた。

「連絡は頂けるのですね？」

短くそしてか弱い言葉だった。

「お約束します。連絡後、貴女がその場に來れるかはあなた次第です」

「軍が警備をしているでしょうから……」

桐原は軍の警備までの面倒はみれないと伝える。

「……わかりました……連絡をお待ちします……桐原さん」

ミランダはそう告げるとソファを立つ。

「ミランダさん……くれぐれも不用意な行動は慎んで下さい」

桐原はミランダに念を押しておく。迂闊に動かれれば彼女の身も危険だ。

ミランダは頷くとそのまま玄関へと向かった。

桐原もコートを羽織り後に続く。そろそろ安雲からの出迎えが来る時間であった。

二人でマンションをでてミランダを見送る。

マンションの前には黒塗りの乗用車がすでに止まっており、桐原の姿を見た

軍服姿の運転手が後部ドアを開ける。

ミランダはそのまま他人のふりをして車の横を抜けていった。

桐原は座席に座り、マンションを去るミランダの背中を見つめた。

その背中は女性のものであり、小さく触れば壊れそうなほど細かった。

贖罪への階段 第12話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

誤字脱字や小説の書き方自体がなっていないので
皆さまにはご迷惑をおかしてでしよう。
許して下さい。

この物語を読んで下さっている方、よろしければ
「読んだよー」などコメントをいただければ嬉しいです。お願いします。

贖罪への階段 第13話（前書き）

今回もグロ等なしです。

贖罪への階段 第13話

桐原は車を降りる。

都心の中心部にありながらオフィス街とは異質な雰囲気を持つ。外壁は白く数多くある窓は夕日を反射し、光り輝いていた。

この国の防衛を主たる業務としている防衛省である。

正面入り口に安雲の姿があった。桐原は安雲へと歩みを進める。安雲も桐原の姿を確認し、礼帽を脱ぎ頭を下げる。

「桐原さん、わざわざご足労感謝致します。こちらへどうぞ」

安雲は礼帽を被りながら防衛省の中へと案内をする。

正面入り口を抜けるとそこは大きな吹き抜けになっており中心には総合案内受付がある。

その左右には金属探知ゲートと守衛が来訪者のチェックをしていた。

安雲はゲートの守衛に声をかけ、桐原をそのゲートの脇から案内する。

桐原はボディチェックなしで内部へと入ることを許可されたのだ。

桐原は安雲の背中に質問をする。

「いいんですかね？ チェックもなしで……」

「ええ……ここで貴方が事を起こす理由がありませんから」

安雲は当然だと言わんばかりに答えた。

綺麗に清掃された廊下を通り、エレベーターへと向かう。
エレベーターの内部に入り、ボタンではなく鍵穴にキーを差し込む。
小さな蓋があきそこにあるボタンを安雲は押した。
通常では入れない階へのボタンだろうと桐原思った。

エレベーターが下降する間、二人には会話はなかった。

やがてエレベーターは指定された階へと到着する。
エレベーターを降り、廊下を進む。安雲はカードキーを取り出し
スキャナーに通す。暗証番号を打ち込むと音も立てずに鉄製のドア
が開いた。

そこは執務室であろうと桐原は思った。
部屋には大きなデスクがあり、ソファとテーブルがひと組。
壁には液晶ディスプレイが何枚か設置されていた。

「どうぞ、桐原さんおかけください」

安雲はソファへと桐原を案内する。

桐原は指示されたソファへ腰を降ろす。
安雲も桐原の正面のソファに座った。テーブルにある小型端末を操
作し
コーヒーを2つ持ってこさせるようだ。

「本日はお呼び立てして申し訳ありません」

安雲は改めて桐原に謝辞を述べる。

「桐原さんにここまでお越しいただいたのには訳があります」

「おわかりでしょうが森川武の事案についてです」

礼帽を脱ぎ、安雲は呼び出した理由を説明した。

「森川には軍の監視がついているはずでしたよね？」

森川には24時間体制で軍の監視がついているはずである。

いかなる行動を取ろうとも軍はそれを事前に察知できるはずだ。

桐原が呼び出されるということは森川をロストしたかもしくは安雲にとって予想外の出来事が起きたかどちらかであると桐原は思った。

「ええ……森川には現在も監視が付いております。ただ一点お知らせすべき事が……」

安雲は言葉を止めた。ブザーが鳴り安雲の部下であろう女性がコーヒーを運んできた。

安雲は短く部下に礼を述べ、部下を退出させる。

お互いコーヒーに口をつける。桐原は安雲の言葉の続きを待った。

「本日、森川武が異形種を召喚した事を確認しました。

これは我々の中では予想外の事です。魔術の術式で異形召喚が存在するのは軍でも

確認されていますが、魔術協会で禁忌とされ現在は使用する者は存在しないと報告されていましたから」

安雲はそこまで言うとしど困った表情になった。

「桐原さんには森川武を処理して頂く訳ですが、少しばかり無理な状況ではないかと思いましてね」

桐原は森川がなんらかの禁忌を会得しているのは予想内であつた。だがそれが異形種の召喚とはよりにもよってというしかなかった。

「召喚ですか……ですが召喚できたとしても脅威レベルの小さい異形種に限られるはずです」

桐原は冷静に分析をする。

異形種の召喚にも種類がある。高等種を呼び出す術式もあるはずだがそれは自己の破滅を意味する

あくまで呼び出した術者がコントロールできる低級種でなければ呼び出した瞬間に殺されるだけだからだ。

「桐原さんの言うとおり森川が召喚したのは脅威レベルの比較的低い物でした」

「しかし、森川が万が一高等種を召喚しない保証はありません」

安雲は示唆しているのは森川が追い詰められた際、高等種を召喚してしまうという事だった。

「その可能性はありますね……しかしなぜ森川は今日になって異形を召喚したのですか？」

桐原は森川が異形を召喚したのであれば何か行動を起こしたはずだと確信した。

異形を召喚し、何をしたのかそれを安雲は知っているはずである。

「本日、午後湾岸高速道路で森川と異形の出現を観測しました」

安雲は事務的に説明をした。

「何故事前にそれを察知できなかったのですか？ 軍は森川を監視しているのでしょうか？」

桐原は当然の質問をする。

「森川を監視していた連中が一時的にロストしたのです。そして補足した時には……」

安雲は事実を隠した。表向き監視している情報部がロストしたのは事実だが

直属の部隊は森川を補足し続けていた。森川が行動しやすく情報部監視班に邪魔をしたのは安雲の部隊である。

「多数の一般人の犠牲者と軍人1名が殺害されてね」

安雲は困ったものだといわんばかりの表情をする。

「森川の狙いはその軍人だったのですか？」

桐原は何故森川が軍の人間を狙うのかその理由を知らない。だが最初の犠牲者と今回の犠牲者は軍人である。今回は一般人も巻き込んだようだがそれは異形のせいだろうと思った。

「今日お越し頂いたのは桐原さんに森川武がなぜこのような事をする

のか知ってもらう為です」

安雲は端末を操作し、壁のディスプレイを起動させる。

桐原は安雲が何故、森川武の犯行理由を説明するのかわからなかった。

どのような理由があればすでに森川は手を汚してしまっている。被害者は軍人だけでなく一般人にまで広がりを見せ、もはやテロに近いだろう。

主義や思想が関係していたとしても森川は後戻りをできないはずだ。

「安雲さん……何故森川の行動の理由を私に教えるのですか？」

桐原は単刀直入に質問をした。

「桐原さんには知っておいて欲しいのです。森川武を殺すものとしてね」

安雲は一息置いて話を続ける。

「今からお話する内容は軍事機密を含みます。ですから他言は無用に願いたい」

「私がそれを守るという保証はありませんよ……安雲さん」

「ええ……ですが知ってほしいのです。理由をね……」

安雲はそういうとディスプレイの一枚を指差した。

そこには一人の高校生ぐらいであろう女性の写真があった。

その下にはたくさんのグラフや数字が並ぶ。

「これはなんですか？」

「この子は森川武の妹です。そして異能者だった……」

安雲はため息をつき話を続ける。

「これは16年前、当時の内閣と軍部が行った日本全国の異能者となりうる可能性を持つ者を全て集め、人工的に能力開花を行う秘密プロジェクトのデータです」

「そのプロジェクトに森川武の妹が参加していたということですか」

「ええ……正確には招集させられたと言った方が正しいでしょうね。国民が何らかの病気で医療機関に行った際に血液を採取し分析。そして異能者としての素質がある者を選抜したんです」

「森川武とその妹は幼くして両親を亡くし、身寄りもなく正教会で育てられました」

桐原は森川が正教会関係者であることを知っていたがここでは黙っていたように思った。

「そして森川武の妹はある日、異能者としての才能を認められて当局に拉致されました」

安雲は恐ろしい事を簡単に言った。

国の主導で一般人の拉致が行われたというのである。

この国での年間行方不明者が3万人を超えているのは桐原も知っているがそれが

16年前に国家主導で行われていたのだ。

「この国の年間行方不明者の一部がこのプロジェクトの為に行われたのです」

安雲は桐原の考えを補足するかのように言った。

「家族が搜索願いを出しても国家主導ですから見つかるわけはありません」

「その拉致は今現在も行われているのですか？」

桐原はそれが現在も継続されているのか質問をした。

「現在は行われておりません。現在は志願形式に変更になっております」

安雲は嘘をついた。たしかに表向きは志願形式になっているが身寄りのない子供や

今も行われている秘密裏な検査で可能性があるかと判断された者は強制招集対象である。

桐原も安雲の言葉を鵜呑みにしはしていなかった。

今もそれは続いているはずだと思った。異能者の必要性は年々増加している。

異形種がこの世界へ出現する頻度の増加と比例して各国は異能者の

確保に躍起であるからだ。

「その16年前に拉致され、どうなったのですか？」

桐原は話の続きを促す。

「当時の異能者開発にあたっては米国で臨床実験中の薬剤が使用されました。ですがその薬剤は現在よりも副作用が強く投与された者はほとんど死亡しました」

安雲はうんざりするように言った。

「当時のプロジェクトチームは少々強引でね……副作用が著しくても使用を続行したのですよその結果、被験者のほとんどが死亡し残った者は僅かでした」

「まあ当時、この国が置かれていた状況を考えても強引でしたね。他国に後れをとっていた

異能者開発を進めるばかりに米国でも不評の薬剤を使っんですから……」

桐原は当時を振り返った。当時桐原は16歳になろうとしていた。魔術や神秘は異形種に対して効果が薄く、多大な犠牲を人類に強いていた。

桐原はすでに魔術協会本部から戻っており、学生生活をしながら独自に魔術を

学んでいた。異能者の存在は人類のよりどころになっていたのだ。

「で……その妹は薬の副作用で亡くなったのですか？」

「いえ…… 幸か不幸か森川武の妹は生き残りました。ですが……」

「その副作用を乗り切ったのでしょうか？　なら……」

そう言い掛けて桐原は言葉を止めた。

例え副作用を乗り切っても拉致されてきたのだ解放されるわけがない。

異能者として軍の管理下に置かれるはずだ。

脱走しようとするれば秘密保持の為に処分されるだろう。

少し間を置き安雲は話し始める。

「彼女は解放されたのです。森川武の元へ返されました……」

安雲の言葉は歯切れが悪くなっていた。

桐原はなぜ森川の妹が解放されたのか疑問だった。

異能者としての才能が思ったほどでなかったとしても彼女が持っている情報は

国家を揺るがすスキャンダルである。

桐原の脳裏に恐ろしい考えが浮かぶ。

自然に桐原の表情は険しくなっていたのだろう。安雲は大きく頷くと口を開いた。

「桐原さんのご想像は正解でしょう。彼女は副作用を乗り切った。

しかし異能者としては能力が低すぎたのです……投与されてもなんの変化もおきなかったから解放されたのです。

……脳への外科的处理をされた後でね」

それは桐原の予想どおりだった。記憶を持っている以上それを削除しなければ

家族の元へなど返すわけがない。薬物の投与か脳への外科的アプローチで記憶野を操作する

のである。その結果もはや通常の生活は出来ず、廃人として一生を過ごす事を意味した。

「森川武の妹は廃人にさせられた……」

桐原の口から独りでに言葉が出る。

「その通りです。愛する妹が突然姿を消し、帰ってきた時は廃人同然だった訳です」

安雲はそこで話を一旦切った。桐原に考える時間を与えようとした。

桐原は森川の心中を考えた。妹を突然奪われ、そして変わり果てた姿で再会する。

森川でなくても誰が何のためにと考えるだろう。

そして正教会の調停者であった森川は妹の看病と並行して犯人探しを始めたのだろう。

調停者である森川であればさほど時間は掛らず真相の一端へはたどり着いたはずだ。

桐原の考えが終わるのを見計らって安雲が話を再開する。

「当時の森川は、国家が絡んでる所まではたどり着いたでしょう。しかしそれ以上の行動はとらなかったのです。自分一人なら例え国家を敵に回してもよかったでしょうが森川には病院で寝たきりの妹がいた。廃人となろうとも森川には大事な妹だったのです」

寝たきりの妹をこれ以上の危険にはあわせられないと判断したんだろう。

回復の見込みがなくとも傍にいたいと願ったのかもしれない。森川が復讐にできれば軍も黙ってはいないだろう。マスコミにでも駆け込む手段もあるだろうが、黙殺され生き証人の妹は証言は出来ない。

そればかりか処分される可能性さえある。桐原は森川の当時の心境を推測した。

「それで現在、森川の妹はまだ寝たきりなのですか？」

桐原は結果を予測していたが安雲に問いを掛ける。

安雲はコーヒーを飲み干し首を横に振る。

「森川の妹は普通の生活はおろか会話すら不可能だろうと診断されていました。

しかし、奇跡は起こったのです。森川の妹は徐々に回復し始めてきました。

それが二人にとってもっとも最悪な事態を起こしたのです」

記憶や会話機能が復元するだけでも奇跡だが回復が軍にしなければ

それは

対象の処分に変更されるだろう。

「回復した結果、軍に処分されたのですか？」

桐原は軍という組織に改めて嫌悪感を持った。

「いえ……軍は動きませんでした。動く必要がなかったのです」

「どういう事ですか……」

「森川の妹は回復したといっても記憶の混濁と時より襲う何かしらの恐怖に手がつけられない状態でした。そして……ある日、森川の妹は鎮静剤を打ちに来た医師と看護婦を無意識に肉塊にしまったのです」

「異能者としての能力は発現してなかったのではないですか？」

「もちろん。投薬をした時点ではなにも発現しなかったとデータにあります。しかし

何かをきっかけに能力が発現する場合は過去にも報告があります。

森川の妹の場合は

それが遅かったのです……そして病室を血だまりした時、彼女の意識は戻ってしまった」

「最悪だな……意識が戻ったと言いましたが、その状況を把握できるほどだったのか？」

自分を認識した時に目の前が惨劇だったら通常の人間はおかしくなるだろう。

そしてそれが自分の犯した行為だと知ったら尚の事である。

「森川の妹はその時、ほぼ通常の機能を回復していたと思われます。ですから自分が過去に何をされ

そして目の前に散らばっている人間の破片を見た時それが自分が行った事だと理解したはず

です。そして彼女は病院を飛び出した……」

「その時、森川はどうしてたんだ？ 病院に駆けつけなかったのか？」

桐原の言葉は敬語がなくなり、怒りを滲ませていた。

「森川武は当時、調停者の任務でこの街を離れていた模様です」

安雲は残念そうに言った。

「そして彼女は街を彷徨い、ビルの屋上から身を投げた……彼女にとって医師達を殺した事と

自らの能力が恐ろしかったのでしょうか。能力をコントロールできていなかったらしく

彼女が通ったであろうルートには所々破壊されていました。自分の意志とは無関係に発動し

目の前の物を破壊してしまう。そんな状況で彼女は自らの命を絶つことしか解決方法がなかったと思われま

す」

「お前達が殺したも同然だ」

桐原は自分でも言葉が変わっている事に気がついた。

森川武に復讐されても当然だ。だがそれと同時に軍が自分たちで森川を処理しないかという事に対する疑問が強くなる。

「何故自分達で森川を始末しない……」

桐原は目の前の軍人に対して憎しみを覚えていた。

「桐原さんをお呼びしたのはその疑問に対する返事をする為でもあります」

安雲は桐原の憎しみの目を逸らさず見返す。

「貴方のおっしゃる通り森川武の妹を殺したのは我々軍部です。それは反論の余地はありません
だからこそ私は森川武を自由にしているのです」

「言っている意味がわからない。軍は今も同じように異能者開発をしているのだろう?」

両者はしばし沈黙する。

「そして犠牲者を出し続けている……」

その言葉は桐原ではなく安雲からだった。

「軍や国家が国民を騙し、秘密を隠匿し続けています。そして私もその一人です」

安雲は懺悔するかのように桐原に告げる。

「そんな懺悔はマスコミにでもしてくれ……俺にすることじゃない」

桐原が吐き捨てるように安雲に言った。

桐原は安雲が現在、異能者開発に関わっているだろう役職だと判断した。

でなければ16年前の機密事項を知るはずもない。

安雲の話だと森川武を自由にしているのは安雲自身の判断だということだ。

森川武の復讐を手助けしてるとしか考えられない。

「あんたは森川を手助けしてるのか？」

「さあ……どうでしょうね。私は私の考えで行動しています。桐原さんにこの話を話すのも

私の考えです。ただ一つ言えることは16年前のこの実験には私は関与してません」

安雲は当時の事は自分の管轄ではないと伝えた。

「あんたはこれから森川をどうするつもりだ……」

桐原はディスプレイに映るあどけない少女を見ていた。

「森川武を処分します。もちろん状況が変わりましたので桐原さんには増援を付けます。」

先程、桐原さんの家を訪ねて来られていた協会の方でいかがでしょうか？」

安雲はさりりという。

桐原は軍の情報の早さを痛感した。ミランダがマークされることは予想したが

軍のほうからミランダを駆り出すとは思っていなかった。

桐原には増援は好都合だが、ミランダと森川の関係がどのような事態を招くかが

不安要素であった。

「魔術士が一人増えても増援というほどではないだろう」

桐原は何も失う物がない森川武が禁忌を使い最悪の事態を招くだろうと予想した。

「それでは私も増援としてご協力しましょう」

安雲は自らも増援として行く旨を伝える。

「あんたはこの事件に関係ないんじゃないかったか？」

桐原は最大限の嫌味をぶつける。

「軍から出さない訳にもいかないでしょう。それであれば私が適任だと思います」

「あんたらのやり方には心底反吐がでるよ」

「でしょうね……ですがこれが現実であり、我々人類がとらざるを得ない手段です」

安雲はきっぱりと言う。

「話はこれで終わりです。桐原さん……何故この話をしたのか疑問でしょうが

真実を知る人間は少ないのです。貴方には真実をお話しておきたかったのです。

思うところはあるでしょうが今後ともよろしくお願いします」

そついうと安雲は頭をさげた。

桐原は正直迷っていた。森川武の行動には同情できる。軍や国が秘密裏に

自分たちで作った法律というルールを曲げ犠牲者を出している。

それを森川武もルールを破り復讐をする。それを何故桐原が倒さねばならないのか。

倒すべき相手は他ならぬ目の前の人物ではないのか。

桐原は森川と対峙するまでその答えをだすのを止めた。

「私のご心配はしなくて結構です。こうみえて異能者ですから」

安雲は自分が異能者だと告白した。

「元から心配してない。あんたがどうなろうと俺は知らない」

桐原は席を立つ、安雲は端末を操作し部下を呼び出した。程なくして部下が入ってくる。

「桐原さんをお送りしてくれ。今日はありがとうございました」

「余計な企みはしないほうがいい。安雲准将」

そういつて桐原は部屋を後にした。

残された安雲はディスプレイの電源を落とす。

桐原の表情は嫌悪そのものだった。森川と対峙したとき桐原がどう動くか

そして桐原の家を訪れた魔術士の女、不確定要素を多く含むが安雲の予定に大きな

変更はない。ただ森川武がその命を終える時に華を添えてやろうと思っただけだった。

贖罪への階段 第13話（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
感謝だけです。

贖罪への階段 第14話（前書き）

特にはないです。

贖罪への階段 第14話

桐原は自宅へと戻っていた。

ミランダへ連絡をし、軍からの許可が出た事を伝える。

森川との闘いにミランダが固執してる点は憂慮すべき事だが既に異能種を召喚できる森川との戦闘には必要と判断したからだ。

陽は既に落ち、外は闇に包まれている。

安雲が森川へ同情するとは思えない。安雲自身何かしらの目的があるのだろ。それに自分が組み込まれている事に苛立ちを覚える。

森川が行動を起こす前に見つけ出す手も考えられたが軍が監視している以上

迂闊には行動ができない。桐原は素直に安雲からの連絡に備え睡眠をとることにした。

森川は異形種の召喚を後悔していた。

支配下に置くことには成功したが個体全てを制御することはできなかった。

その為、トンネル内での襲撃時に一般人への攻撃を止める事が出来なかった。

薄暗い倉庫にある壊れかけのTVがトンネル内での被害者の名前を羅列していた。

護衛の異能者に田中を殺され情報を入手出来なかった事も悔やま

れる。

森川は事件の真相を知りたかった。どの機関の誰が関わったかそれを全てしらなければ
復讐は終われない

それを全て知っても全てを殺して何が残るのだろう。

漠然とした疑問が森川を襲う。自分が何人殺しても妹は帰ってこない
のである。

今日犠牲になった者達も家族がいただろう。

それを森川は奪った。軍とやら変わりが無いのではないかと自問
する。

復讐をして何を得ることができなのか、たった一人の家族を奪われ
己が信じる神をも捨てた自分。そしてもっとも忌み嫌う異形をも使
役する。

ただ力を望み、その為に多くの命を奪ってきた。

そんな兄を妹は許してくれるのだろうか……

考えを振り払うかのように森川は立ちあがり禁忌を読み解いて覚
えた術式を使用する。

それは今まで使う事はないと思っていた物であり、森川の最終手段
であつた。

異形種の召喚で駒は足りる。だが森川自身の戦闘能力が足りないの
である。

これからの戦闘を考えた場合、自分自身の能力向上が急務なのだ。

正教会で神秘を学び、魔術協会へ身分を隠し14年学んだ。

それでも異能者と多数戦うであろうこれからの戦闘では実力不足な
のである。

だからこそ禁忌に記されていた高等種を召喚し、契約を結び己が力と変えるのである。

契約の際に要求されるものは記されていた。術者の肉体もしくは魂である。

呼び出した瞬間に引き裂かれる可能性もあるがこのままでは目的を達成できる見込みはなかった。

運を天に任せ、術式を行使する。普段使う術式のような短い物ではない。

森川は裸電球が揺れる倉庫に結界を張る。失敗した場合に最小限の被害で済ます為だ。

詠唱の言葉を紡ぐ、その詠唱は異形と呼ばれる悪魔を現世へと呼び出す。

言葉は木霊し、結界内を反復する。

その言葉は悪しき物を賛美し、称賛する。

次第に結界の中、倉庫の全体へと共鳴し始める。

妹を奪った神に、何も救いをもたらさない神への森川自身の言葉でもあった。

額から汗が流れ床へと堕ちる。それは森川が堕ちる瞬間でもあった。

詠唱が終了し、森川は目を開ける。目の前の空間にはぱつかりと黒い穴が空いていた。

そこからは禍々しい角が生え、憎悪に満ちた表情の異形が森川を見

つめていた。

「人間がなんの用だ……全てを捨て我に何を望む……」

黒い穴からゆっくり這い出る異形の言葉は森川の脳内へ直接響いていた。

「力が欲しい。それだけだ」

森川は目の前の異形に飲み込まれまいと精神を集中させる。

異形から溢れる魔力はそれだけで森川を殺せるのではないかと思うほどであった。

「……単純な願いだな。願いを叶えるのは容易ではないぞ人間」

異形は人型であった。体長は2メートルを超える。恐ろしいほどの筋肉と背中に生え羽が印象的だった。

「望みはなんだ……魂か？ それとも肉体か？」

森川はその威圧感に怖気づく事もなくその場から動かなかった。

異形は森川の態度に興味を示したようだった。

「そうだな……魂は不要だ。お前の肉体を器にさせもらおうか……」

「肉体を差し出すのは問題はない。だが……それは私の死後でなければならぬ」

「死後だと？ それは何故だ？ それではこちらが不利ではないか……」

異形は森川との会話を楽しんでいた。

「悪魔よ。随分楽しそうだな？ 人間に呼び出されるのが喜びか？」

「愉快だな……何も知らぬお前ら人間を見るのは実に愉快だ」

異形は豪快に笑う。

「魔術士よ。何故お前の死後でなければならぬのだ？ 理由を聞こう」

「私にはやらねばならぬ事がある。それに貴様の力が欲しいのだ」

森川はどんな条件でも飲むつもりだが時間が欲しかった。

「……やらねばならぬ事か。死後であれば主の魂も頂こう。それであれば力を貸そう」

異形は森川が行う事に興味があるようだった。

「魂も肉体も私の死後であれば自由にしろ」

「良からう……契約は成立だ。だが注意しておく、己が力は増大しても命の強さは人間のままだ
生命力まで強くしてやるわけにはいかん……契約の代償がもらえんからな」

異形は忘れるなと忠告をする。

「本来なら呼び出された瞬間に切り刻む所だが、お前からは神に仕える者の匂いがする

そんな奴が我を呼び出したのだ。この世界を楽しませてもらうっ…

…」

異形は自らの腕を切り裂いた。溢れる鮮血を森川の前へ差し出す。

「この血を飲めば契約成立だ。お前の体の中で我は生きる」

「わかった……」

森川は異形の太い腕から流れ出る血を口に含む。

その瞬間に異形は森川の前から消えた。

倉庫は何事もなかったかのように静まり返っていた。

今までの事が夢のように感じたが、森川の体内からあふれる魔力は尋常ではなかった。

その魔力は麻薬のように森川を酔わせる。出来ないことなど存在しないのではないかと

錯覚さえさせる。そんな思考を森川は立ち切った。

そんな森川を異形が笑っているように感じた。

明日、森川の復讐は終わる。どんな警備がしかれていようと突破するだけだった。

これ以上時間を掛けるわけにはいかないと体内の異形に言い聞かせる。

全てが明日で終わる。

懷から一枚の写真を出す。

もう写真でしか存在しない亡き妹の写真である。

その笑顔をもう一度見るこができるのだろうか……森川は堕ちた自分に問いかけた。

贖罪への階段 第14話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

これからも読んで頂けると幸いです。

贖罪への階段 第15話（前書き）

下手ですが読んで頂ければうれしいです。

贖罪への階段 第15話

唐津は研究所を意気揚々と車に乗車し出発する。

今日は、表の顔である脳外科医としての学会発表会だった。

田中少佐が森川に殺害されたと聞いた時は学会出席さえ辞退しようと思った

程であつたが、軍に要請した警護の増強が通り、今では首相以上の陣容である。

この一週間、森川の襲撃を恐れ研究所から外出しなかったがこれだけの警備であれば森川など恐れる必要はないと唐津は思っていた。

それ以上に脳外科として今回の発表はおいそれと逃す訳にはいかな

い。
異能者の研究では成果は芳しくないが、その被験者を使いまわした脳外科の

成果は表の世界での地位を上げるはずであつた。

「出してくれ。くれぐれも時間に遅れないようにな」

唐津は上機嫌に運転手へ指示をだす。

護衛の4WD車を2台先頭にして車列は研究所を後にする。

唐津は知らなかった。この警護の増強は安雲の指示であり、会場の警備も全て

安雲直属ではないが息のかかった部隊だった。

安雲はその頃、街の中心部にいた。

そこは中心部でありながらビルを立て直し為、更地になっていた場所である。

大型の装甲車を改造した指揮車両に乗り込み唐津が研究所を出たことを無線で聞いていた。

唐津が出席する学会はナクスールホテルで行われる。

車内のディスプレイに映し出される車列を確認し、ホテル内のカメラを確認する。

すでにホテルには多くの学会参加者が来訪しており警備を完璧にするのは困難を極めるはずだ。

安雲には完璧にする気はなかった。せいぜい唐津が逃げ出さない程度に見せるだけだった。

「第一班から第二班までは会場周辺で待機、第4師団からの増援は全て包囲網へ回せ」

第4師団は本日行われる政治家の資金集めパーティーの警備用に戻された部隊である。

指揮命令系統は安雲にはない。だが安雲は独自のコネクションを使い有力政治家を力を使用していた。

安雲の計画には支障はそれほどないが、数が多いと時間の浪費及び真実が漏えいする可能性があった。

その為、安雲はパーティー会場の警備を薄くしたのだった。

大臣のパーティーが行われるホテルはナクスールホテルではなく500メートル程離れた

ベイラウンドホテルである。ホテルの警備は安雲の担当ではなく、権力に媚を売るしか脳のない

連中であつた。異形種が出現しても出勤しないただのお飾りである。人数も先日、異形種が出現したにも関わらず、1個中隊規模であつた。

これは安雲の計画には好都合であつた。第4師団が配備されたら厄介だったが今はそれもない。

安雲は指揮車両から外に出る。

12月の弱い日差しが心地よかつた。小型無線を取り出す。

「行動は予定どおり、状況が開始されたらベイラウンドホテルへ急行し実力行使せよ
尚、当初指示した政治家はホテル内にいる協力者が避難をする。それ以外は全て排除しろ」

安雲は手早く指示をだし、無線を切る。

空を見上げ呟いた。

「いい天気じゃないか……森川武……」

携帯が鳴っていた。

時刻は午前9時を回っている。桐原は携帯を取り受話ボタンを押した。

「桐原さんですね。安雲准将からの伝言です。森川武が動きました。ナスクールホテルまで至急お越しください」

電話は安雲の部下からであった。

桐原はミランダへ連絡し急ぎ準備をする。森川が動いたのであれば一刻を争う。

ナスクールホテルは街の中心だ。そこで異形種を召喚されれば被害は大きくなる。

安雲は被害を抑えるつもりはないのだろう。改めて嫌悪感が沸く。街の中心で事が起これば安雲自身も軍での立場はないはずだ。しかし安雲が軍さえも手玉にとっているのであればありえる話しだと感じた。

ミランダとはナスクールの前で待ち合わせをしている。

桐原はコートを羽織り、マンションを飛び出した。マンション出口を出たところで思いがけない人物に出会った。

それはシスターであった。

シスターはバスケットをもっていた。

桐原の姿を見て笑顔を見せたがすぐに状況を察知したらしく凜とした顔に戻る。

「桐原様、行かれるのですね？ 森川の所へ」

真っすぐな瞳で桐原を見る。

「……シスター何故その名前を？」

シスターはその名前を知らないはずであった。

「正教会の情報網も侮れませんよ。桐原様……家の鍵をお貸しください」

そういつてシスターは右手を差し出す。

桐原は無言で鍵を渡した。

「部屋の中、漁らない下さいよ……シスター」

「ご無事をお祈りしております。お部屋でお待ちしてます」

「わかりました。生きていたらお会いしましょう」

桐原は駐車場へと走って行った。

鍵を握りしめシスターは祈る。桐原の無事と森川武の罪が許されるように……

森川武はビルの屋上にいた。

頭髪を綺麗に整え、高級オーダースーツを着込んでいた。

ナクスールホテルは目と鼻の先だ。

そしてこのビルは妹の最後の場所でもあった。

腕時計に目をやる。

ホテルの正面ロビーには学会に参加する人間の車がひっきりなしに到着していた。

目を凝らし目的の人物を探す、普通なら双眼鏡を使用しなければ判別など無理だろう

だが今の森川にはそれが不必要い。異形の力を手に入れた森川には造作もないことだ。

12月の寒さも感じない。目の前に広がる街を破壊したい衝動が込み上がってくる。
それを必死に抑え、注意力を持続させる。

唐津の行動予定はほとんどが研究所詰めで外出するのはこの日だけだった。

軍関係ではない為、警備は薄くなると読んだのである。

事実ホテル周辺は思いのほか薄く、森川はここまですんなり来れたのだった。

軍の動向を気にする余裕はない。何かをしかけているならそれごと踏みつぶすだけだ。

時刻が10時に差ししかろうとした時、ホテルの正面へ多数の車列が流れ込んできた。

それは大国のVIPを思わせる警備であった。

森川は目を凝らす。

警備車両から降りた完全武装の兵士が辺りを警戒している。

周辺の安全を確認した後、一人の男が車を降りてきた。

眼鏡をかけ、脅えながら足早にホテルへと消える。

「……奴だ……」

瞳を閉じ遠距離から近距離へと視力を変える。
先程まで至近距離までズームしていた映像は無く、米粒のように動く警備の兵士だけが見えた。

車列はホテルを出てどこかにいくようだった。

森川は手に持っていた花束を屋上に一角に置きその場を去る。

階段を降りながら異形を召喚する術式を詠唱する。森川の後には10体を超える異形種が現れていた。

「これで最後だ……なにかも……」

街は普段と変わりなく動いてるように見えた。

贖罪への階段 第15話（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

贖罪への階段 第16話（前書き）

今回は特にありません。

贖罪への階段 第16話

指揮車両のディスプレイには屋上に佇む森川を映しだしていた。外から戻った安雲が情報部に張り込ませている偽物の撤収を指示する。

情報部が今まで監視していたのは森川本人ではなく安雲が用意した異能者であった。異能者による森川襲撃の後、偽物を用意しそれを情報部に
あてがった訳である。

田中少佐襲撃の際も森川本人が動くとか合わせ偽物をロストさせていた。

今頃、情報部は蜂の巣を突いた騒ぎになっているはずだと安雲は思った。

桐原や女魔術士もここに到着する頃にはひと騒ぎあった後だ。

「ここは任せる。タイミングはこちらから連絡する」
安雲はナクスールホテルへ向かう。

ナクスールホテルは、白を基調とした外壁で包まれていた。半月を象ったその外見は優雅で気品に溢れている。人の出入りは学会が開始されている為か少なく、警備も正面ドアにしかないかった。

森川はドアマンに近づき声を掛けた。

「まだ部屋は開いていますか？」

「申し訳ありません。本日は脳外科学会の為、満室でございます」
ドアマンは至極丁寧な満室の旨を伝える。

「いや、構いませんよ。でわ中で食事だけでもできますかね？」
森川は笑顔をドアマンと会話を続ける。

「ええ問題ありません。食事でしたら27階にレストランがございます」

ドアマンはその他、和食、洋食などのレストランもあると付け加えた。

森川はドアマンに礼を言い、自動ドアからロビーへ入る。
警備の人間達も不審人物にしか的を絞っていないようだった。
今の森川は上流階級の気品を醸し出していた。

ロビーは広く吹き抜けになっている。煌びやかなシャンデリアが客を出迎える。

ロビー内にも警備はいたが、正面と同じSPである。
有名ホテルに完全武装の兵士を置く訳にもいかなかったのだろう。

森川は受付で再度レストランの階数を聞き、エレベーターへ向かう。

エレベーターが到着の音を告げた時、正面ドアの外から発砲音が聞こえた。

中に入り開閉ボタンを押す。ドアが閉まる時、ロビーを悲鳴と銃声が支配した。

安雲はナスクールホテルの中にいた。

3階にあるロビーを見渡せるカフェである。コーヒーを口に運びながらたった今

ロビーを抜けていく森川を見つめていた。

受付で何かを話しエレベータへ向かう森川から視線を外し、携帯無線を取りだした。

こもった銃声が外界とホテルを区切る自動ドアから聞こえる。

程なくして、ガラスの割れる音と悲鳴がロビーに響いた。

安雲は、割れたガラスを踏み越えゆっくりと侵入してくる異形種を確認し無線で指示をだす。

ロビーは悲鳴と銃声に包まれていた。カフェにいた宿泊客や従業員も慌てて店を出る。

「安雲だ。異形種を確認した……状況を開始せよ」

指示を出し、慌てふためく周りをよそにゆっくりとエレベータではなく、階段へ向かう。

ロビーは既に死体と獲物を探す異形種だけになっていた。

安雲の指示を受けた指揮車からは、各部隊へ秘匿回線で指示が復唱される。

ベイグランドホテル周辺に止めてあった大型トラックの荷台が自動で開いていった。

その暗闇からは小型の異形種が街へと放たれいく。

ベイグランドホテル周辺で警備にあたっていた兵士は突如現れた異形に裂かれ
噛み殺されていく。警備を担当していたのはSPではなく武装した兵士であった。

被害を出しながらもホテル正面入り口を素早く固める。

その状況を確認し、指揮車両から新たな指示が飛ぶ。

「第二段階へ移行。対象を排除せよ」

安雲に後を任された副官が無線を掴み指示をだす。

ベイグランドホテル地下駐車場に止めてある複数の車両から完全武装の兵士が

流れる水のようにホテル内へと駆けこんでいく。

安雲直属の異能者混成部隊であった。

ホテル正面で戦う兵士とは違う装備をしている。軍正式採用の装備ではなく

世界各国から選りすぐった装備であった。最新式自動小銃や携行重火器それに
大型対物ライフルをも装備していた。

ホテル地下入り口を警備していた兵士達は一瞬、我を失っていた。素早く駆け寄ってくる完全武装の一団。武器を構える前に地下エレベーター前は
血だまりに変わっていた。

一団は死体を踏み越え地下からホテル内へとなだれ込む。

ミランダは桐原の連絡を受けた時、ナスクールホテル近くにあるホテルの一室にいた。

身支度をして術具の点検をしていた。

窓を振動させる爆発音が響く。

立ちあがり窓へと駆け寄る。外には立ちあがる黒煙と微かに聞こえる銃声が響く。

コートをハンガーから掴み取り部屋を飛び出した。

あの煙の立ちあがる場所に森川がいる。

そう思うとミランダは複雑な気持ちになる。

愛した男があの場合にいる。同時に自分を捨てた男なのだ。信頼を踏みにじり、尊敬する師をも殺した男。

エレベーターが来る時間かもどかしい。

エレベーターを降り、ホテルを出る。

外に出ると銃声はより明確に聞こえ、ときより悲鳴も聞こえた。

「……あの人を止めなければ……」

ミランダは煙の上がるナスクールホテル方面を見つめて呟いた。

ナスクールホテルへ走る。ホテル方面から避難してくる一般人と逆方向へただ走る。コートをなびかせブロンドの髪は乱れた。

人波をかき分け前に進む。倒れ後続に踏みつけられる女性や老人が

助けを求めていた。

その声は誰にも届かず悲鳴と怒号にかき消されていく。

ミランダがナスクールホテル付近に付いた時には周辺に生きた人間はいなかった。

人間の遺体とそれを貪る異形の姿だけである。

何かが焦げる臭気が蔓延し、胸がむかついてくる。

死体を貪るのを止め、生きた獲物を察知した異形はミランダへと攻撃姿勢をとる

大型肉食獣が狩りをするようだった。

姿勢を低くし飛びかかる準備をしている。数は15体以上はいるだろう。

一人では突破するのは困難だとミランダの脳が警報をならす。

術式を展開し詠唱を開始する。

雄たけびを上げる左側の異形へ術式を発動させた。

ミランダのかざした手先から氷の塊がアスファルトへと突き刺さる。

氷が急激に生成される音は大木の倒れる音に似ていた。

異形に向かいアスファルトを裂きながら氷の波が押し寄せる。

轟音と共に車ごと氷柱が突き刺さった。

断末魔の叫びをあげ異形は息絶えた。

仲間の死を笑うかのように別の異形が雄たけびを上げる。

一斉に襲ってくる様子はなく狩りを楽しでいるようだった。

一匹つつミランダの周りを囲むように移動する。

「趣味が悪いのは姿だけじゃないわね……」
ミランダは悪態について次の術式を開始する。

自分の置かれている状況が著しく悪いことは把握していた。あと何匹かは殺せるだろう。

だが、遊ぶのを止めた異形が一斉に攻撃してきたらミランダに助かる術は無い。

コートから金属製の細い杭を取り出す。

30センチ程の杭にはびっしりと古代ルーンが彫り込まれていた。

左右一本ずつ持ち構える。

なんとしてもこの場を突破し森川武に合わなければならぬと言いつき聞かせた。

術具を異形に投げつけようとした時、後方から車の唸るような排気音が聞こえた。

ミランダは瞬時に横に飛ぶ。

背後から一台の車がミランダを囲もうとしていた異形へ突っ込む。

肉にぶつかる音と金属のひしゃげる音が轟く。

囲みを整えようとしていた異形達は咄嗟に散り、距離をとる。

車とホテル正面の支柱に挟まれた異形は苦しみの叫びを上げていた。

その異形が一段と音量を上げた時、異形の頭部は碎けた。

「うるさいんだ……特に小さい異形はね……」

半壊した車から頭部を抑えながら男が降りる。

「桐原……」

ミランダの諦めかけていた心に希望が戻る。

「さあ……森川と決着をつけようか。ミランダ・ケストル」

桐原はコートを襟を直しミランダの元へと進む。

異形は各々雄たけびを上げ、獲物が増えたことを喜んでいた。

贖罪への階段 第16話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

そろそろ終わりが見えてきました。

残りもあと僅かよろしくお願いします。

贖罪への階段 第17話（前書き）

この物語はグロテスクな表現や
残酷な描写がある場合がありますのでご注意ください

贖罪への階段 第17話

森川を載せたエレベーターが上昇していく。

目線を上げ階数を確認する。数字のランプが数を増やしていく。

森川の降りた階にもロビーの騒乱は伝播していた。

警備のSP達が森川と入れ替わりにエレベーターへと乗り込む。

手にはサブマシンガンを持ち異形種が上の階へと侵入するのを食い止めるつもり

なのだろう。会場の入り口では残ったSP達が退避ルートの確保に向かう所だった。

歩きながら詠唱を開始する。

赤い絨毯に黒い穴が開く、そこから人型の獣が姿を現した。

体長は2メートルを超え、この世界で狼男と分類される異形種である。

穴から這い出たと同時に2体の異形はSPめがけ突進する。

地響きを立て、ただ殺戮をする為に廊下を走り抜ける。

異変に気がついたSPが異形めがけ短機関銃を発射する。

乾いた発射音と兆弾に紛れて異形の腕が唸りを上げる。

丸太で叩かれたように頭部を破壊されたSPが壁に衝突する。

残されたSPも一方的に引き裂かれていった。

死後痙攣を起こしている死体を貪る異形を見下ろしながら森川は会

場のドアを開けた。

防音加工されている為か会場内ではまだ発表が続いていた。壇上で誇らしげに説明をする唐津を見つめながら空いている席を探す。

唐津の表情は自己陶醉に浸っている顔であつた。

森川は前列2列目の席に腰を降ろす。会場はスクリーンでの説明の為、照明を落としている。

唐津の説明に時より会場から感嘆の声が上がる。その声上がるたびに唐津の表情は至福に満たされているようだった。

発表を終えると会場からは大きな拍手が沸いた。唐津は手を上げそれに答える。

森川は懷から術具を取り出す。

そして壇上を去ろうとしている唐津の太もも目がけ投げつけた。

唐津は何が起きたか分からなかった。壇上を去ろうとした時、足が急に重くなったのだ。

ゆっくりと重くなった右足を見下ろす。

太ももに短い短剣が根元まで刺さっていた。

「っ」

視覚した途端、痛みが唐津を襲った。

悲鳴に包まれる会場から参加者達が出口へ殺到する。

唐津の視界には前列の席から立ち上がる森川武の姿が見えた。

安雲はホテルの階段を昇っていた。

唐津が出席している学会の会場は8階である。

ロビーでの騒ぎが徐々に上の階へと広がりつつあった。

耳に付けている受信機から無線が入る。

「准将、そちらのホテルへ桐原とミランダ・ケストルが到着した模様です」

オペレータの冷静な声が響く。

「了解した。バイラグランドの方はどうなってる？」

階数を示す数字は既に6を示していた。

「警備の部隊は依然、正面玄関で異形種に対して応戦をしています。突入部隊は

地下駐車場を制圧。二手に別れ電力部と管制室を制圧中です」

「よし、電源を落としたらパーティー会場へ能力者を突入させる。リストに載っている人間の退避を忘れるな」

階数表示が7を示した時、上の階から銃撃音と悲鳴が聞こえた。無線を切り足早に階段を昇る。

8階の廊下へと入る。壁は銃弾でえぐれ、血痕が付着していた。その色より赤い絨毯の先には食い散らかされた人間の残骸が散乱している。

安雲は礼帽を投げて捨て、制服の第一ボタンをはずした。

会場入り口には狼男が2体。食事を楽しんでいる。

安雲は右手をかざし、衝撃に備える為、両足に力を込めた。

安雲の能力は衝撃波であった。掌から唸りを上げて見えない波が音速で廊下を疾走する。

食事を満喫していた異形は轟音に顔を上げたが右上半身を壁ごと粉碎される。

相棒を失った異形は怯むことは無く、安雲目がけ前傾姿勢のまま突進する。

安雲は絨毯を引き裂きながら迫る異形へ左手を向けた。

既に異形は安雲の目の前まで迫っていた。

筋肉と体毛に覆われた太い腕を振り上げる。腕が振り下ろされれば人間などひとたまりもない。

轟音と共に鮮血が廊下の壁にまき散らされる。

安雲の横を頭部を破壊された異形がそのままのスピードで転がっていった。

安雲は顔に飛び散った返り血を袖で拭きながら会場へと向かう。先程まで異形がいた入り口からは参加者達が悲鳴をあげ飛び出して

来ていた。

廊下の惨劇を目にし、逃げる場所を求め彷徨う。

逃げ出す人々の間をぬって安雲は暗い会場へと入って行った。

桐原とミランダはホテル正面で足止めをされていた。

何体かは始末したが、まだ異形の数は一八体も残っている。正面玄関の優美さは既になく

瓦礫と死体の山が広がっていた。

頭上で衝撃音が響く。粉碎された窓ガラスが光を反射しながら降り注ぐ。

「桐原！ 急がないと」

ミランダは術具である杭を異形に投げつけ発動の詠唱をする。

杭は投げられた瞬間よりその効果を発揮する。

瞬間的に加速を開始し、弾丸と同じ速度で異形へと突き刺さる。

弾着と同時にさらに別の術式を発動させる。

刺さった杭はミランダの追加効果を発生させる術式で体内で変化を始めた。

異形は杭が刺さった程度では息絶える事は無い。

姿勢を立てなおし、飛びかかろうとした異形は絶叫を上げる。

体内で杭はあらゆる方向へ刺を突き出していた。体を突き抜け血で

濡れた金属が姿を見せる。

「こんな奴らに手間取って……」

ミランダは額から流れだす汗を拭いながら呟いた。疲労は徐々にではあるが体力を奪っている。

桐原は術式を詠唱し走りだす。

己の魔術は近接戦闘に特化させた魔術である。肉体を強化し魔力その物を衝撃として叩きこむ。

人間としてはありえない速度で異形へと突き進む。

虚を突かれた異形は反応が遅れた。

桐原の拳は異形の顔面を捉える。手に伝わる感触を合図に拳から魔力が衝撃となって

頭部をトマトのように破壊する。

異形が倒れる前に桐原は次の目標へ跳躍をする。頭部を破壊され鮮血をまき散らす異形が

地面に倒れた時には、桐原の右足は異形の胴体をくの字に折り曲げていた。

ミランダは桐原の戦闘に目を奪われていた。

今まで彼女が見てきたどの魔術士にも当てはまらないスタイル。そして卓越された桐原の技術に恐怖さえ感じた。

残された異形は一斉に桐原に飛びかかる。

桐原は間髪をいれず拳を叩きこんだ。

拳は唸り、次々に醜い化け物を肉の塊に変えていく。

最後の一匹が殴られた衝撃に飛ばされ、車に衝突し絶命する。

桐原は異形の返り血で汚れていた。

拳からは血が滴り落ち、顔には肉片がこびりついている。
それを払いながら桐原はホテルへと向かう。

「ミランダ……上はもつと厳しいぞ」

桐原は背中を向けたまま声をかけた。

ミランダはホテルを見上げる。

森川武を止めなければという一心でここまでできた。
だが異形をも使役する森川をミランダが止められるかはわからなかった。

震える自分の体を押さえつけ桐原に続く。

贖罪への階段 第17話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

やっと面子が一ヶ所に集まりました……

贖罪への階段 第18話（前書き）

グロテスクな表現や残酷な描写が含まれますのでご注意ください。

贖罪への階段 第18話

森川はゆつくりと壇上へ上がる。

唐津は脚を抑え、森川が監視を抜けてここにいるのか考えていた。

「なんで……お前がここにいるんだ。監視はどうした？ 警備の連中は！」

唐津は痛みと恐怖に怯えた。

会場にいるのはもう森川と唐津だけである。

必死に誰かを探す唐津をよそに森川は冷徹な視線を向けていた。

「16年前の実験を覚えているか？ 唐津博士……」

森川は唐津に近づきながら問いかける。

「……16年前？ それがどうしたというんだ！」
唐津は若い頃に上層部に命令されるがまま行った実験を思い出していた。

「あの実験は……私がやったのではない……」痛みを堪えながら森川を見る。

「当時の主任研究者は唐津博士、君のはずだ……」

「ああ……だが、あの実験は失敗だった……」唐津は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「失敗だった……それだけか？」森川は唐津を見下ろす。

「……そうだ。投薬された薬剤は後遺症が強すぎた……あんな物は私の開発した薬剤より数段質が悪い」唐津は自分の成果を誇る様に弁明する。

森川は無言で唐津の脚に突き刺さった術具を踏む。

「ッ」

唐津は森川の脚を両腕で掴み、痛みから逃れようともがいた。

「お前の研究にはこっちは興味がないんだ……」そう言って踏みしめる力を強める。

「なんだってんだ！研究成果が目当てじゃないのか」「もはや叫びに近い声を上げる。

「16年前の実験を指揮したのは誰だ……」語尾が無意識に強くなる。

森川の背後に黒い犬型の様な異形が数匹現れる。

「い……異形……じゃないか！」唐津は血だらけの脚を引きずって逃げようともがく。

森川は無意識に異形種を召喚していた。詠唱は行っていない。高等種との契約によって魔力は増大したが、召喚には術式は必要不可欠である。

それが発動したのは森川の意味ではなく、肉体に宿っている異形種の仕業だと感じた。

素早く現れた異形に対して意識を集中する。

支配下に置かねば異形は唐津を引き裂いてしまう。森川は体内にいる異形へと問いかける。

「勝手に動くな……話が違うではないか」

しばらくして森川の脳内に言葉が響く。

「……なんだ？ 出助けしてやったただけだ。お前が死ぬまで暇なんでな」

重厚な響きと笑い声が脳内に響く。

異形を制止して森川は唐津を睨んだ。

「もう一度問う……誰が指揮したんだ？ あの実験を」今すぐ殺してしまいたい衝動を抑える。

「それは……当時の軍上層部と米国よりの国会議員どもだ」唐津からではなく、会場の座席から聞こえた。

森川は唐津から視線を会場へ向ける。座席には一人の軍人が腰を降ろしていた。

軍人は座席から立ち上がり壇上へ向かいながら森川に話しかける。

「当時、我が国は異能者開発に後れをとっていてね。米国で試験中だった薬剤を無理やり使った訳だよ。まあ米国の代わりにこの国で人体実験をしたといったほうがわかりやすいかな」

軍人は壇上に上がる。そして森川と唐津を交互に見渡し話を続ける。

「その見返りに遅れていた異能者開発のデータを譲り受けた。知つての通り実験は失敗……」

そして被験者達はほとんどが死んだ」

「お前は誰だ……何故その事をしている？」森川はいつでも戦闘を始められる体制を取る。

「私は安雲という、階級は准将。現在は異能者開発の責任者だ」

異能者開発という単語で森川はより殺意を明確に表す。

「森川武、君が知りたい事実を話すつもりでここにきたんだがね」
殺意を受け流すように手を上げる。

「何故お前がそれを私に教えるんだ……お前に利益はなかるう」

「16年前は私の管轄外なんだが、前任者の不手際だ。せめて被害者の君に真実をとね」

安雲は森川の横を通り過ぎ、唐津の元へ近づく。

「助けて下さい……私の作った薬剤じゃない！ あれは私の実験ではない！」

唐津は近づく安雲にすがり付いた。

「唐津博士……」そう短く言うと唐津の脚に刺さった術具を一気に引き抜く。

唐津は予想外の安雲の行動と激し痛みに声すらでず、傷を抑え転がる。

引き抜いた術具を森川に投げ返し、安雲は森川に体を向ける。

「この男はね……自分の犯した罪を認めないんだよ。それがいけない……」

安雲は憐みの視線を唐津に向ける。

「私も16年前とさほど変わらない事をしているんだ。森川武」そう安雲は言った。

「多くの人を殺め、それはこれからも続くだろうね。異形種を駆逐するまでは……」

だからここで君に殺されるのも覚悟の上なんだ。しかし無抵抗にやられるつもりはない」

「こっちは16年前の事件にかかわった奴らを殺せばいい……」

森川は安雲を殺すか判断を迷った。あくまで妹を死に追いやった連中に

復讐できればよい。だがこの状況で危機感さえ醸し出さない安雲の存在は注意すべきだった。

「それでその議員達の名前をおしえてもらおうか……」

「その件だが、こっちにも事情があつてね。君には悪いがこちらで処分させてもらう」

安雲は小型無線機を取り出した。

「安雲だ。ベイグランドの処理はどうなっている？」森川からは視線を外さない。

耳にはめたイヤホンを抜き森川達に聞こえるよう操作する。

「……対象は処理した模様。当初の予定どおり対象は処理」
ノイズに交じりの声がホールに響く。

「了解した。ベイグランドで応戦している護衛部隊も処理しておけ」
「了解しました。処理後撤収します」

森川には状況が把握できなかった。

「16年前に加担した議員がこの近くでパーティーをしててね。君
に対するせめてものお詫び
にこちらで処理をしておいた」

「そんな事をお前がして自分はどうするつもりだ？」
当然の疑問を安雲に投げかける。

「その点は問題ない。君が狙う議員がいなくなれば得をする者達が大勢いてね」

安雲は森川の為でもあり、自分の利益でもあると説明する。

安雲はうずくまる唐津の首を掴み森川へ突き飛ばした。
唐津は自分がどうなるかその一点だけに脅え、震えている。

「この男は好きにするといい……一応、君の妹に投薬をした男だ」
どうぞと手を森川に差し出す。

「もう少ししたら軍の部隊が大挙して押し寄せるだろう。なにせ異
形が沸いたのだからね」

「安雲といったな……お前もこの男と死ぬべきだ」森川は術具を拾

う。

森川は安雲という男が危険極まりない男だと判断した。行動基準が不明瞭なのだ。わざわざ危険を冒し森川の前に現れた。そればかりかこの事態を利用している。そして森川本人さえも利用して……

手を振りかざし唐津の脳天へ突き刺した。

唐津は最後までこれが悪い夢ではないかと思っていた。先程まで浴びていた

大きな拍手が吹き出る鮮血にかわる。

唐津が脳天を突き刺されても安雲は微動だにしなかった。

森川が命令する前に異形は動き出していた。

それは体内にいる異形種の命令である。それは闘いと血に飢えた悪魔が森川自身の意識に介入し結果であった。

漆黒の毛並みをなびかせ、安雲に飛びかかる。

安雲は手をかざしてバックステップを踏む。

異形との距離を開けるには人間の跳躍など無意味に近い。

だが安雲を噛みちぎる前に大きく開いた口は下あごを残し四散した。もう一匹も下半身を轟音と一緒にまき散らす。

「あなたの復讐は終わったはずではなかったかな」森川とさらに距

離をとり話しかける。

森川は安雲の問いに答えられなかった。意識が何かに持って行かれそうになっていた。自分の声か体内に巢食う異形の声かもはや判断できなかった。

必死に抵抗をする。

「コロセ……スベテヲ……コロセ……」ただ憎しみだけが増大していく。

肉体と魂を奪われるのは森川の死後のはずである。だが既に森川の心身を浸食し始めていた。

「まだ……の……はずだぞ……悪魔よ……」必死に抵抗をする。

安雲は森川の異変に気が付いていた。しかし攻撃をせず立っていた。森川が体内に異形種を招き入れている事は一目見て分かっていた。安雲はただの異能者ではない。異質といえる存在なのである。

「堕ちるか……森川武」安雲は今まで見せたことのない悲しみを見せる。

森川の脳内には異形種の命令が響く。それは甘美で魅力的な囁き変化していた。いつそ身を委ねれば苦しみから解放されるはずだ。全てを委ねそうになる自分に歯止めを掛ける。その度に激しい痛みと辛い思い出を見せられて

いた。

肉体と精神を同時に痛めつけられ森川はのたうちまわる。妹の変わり果てた姿が何度も森川の網膜に映し出される。

大きな音を立て会場入り口のドアが開く。

桐原とミランダが壇上へ向かい走り寄る。安雲は苦しむ森川の横を通り桐原達へと向かう。

「何をした！ 安雲！」桐原が怒鳴りつける。

「ここからは桐原さん達の領分です。あとはお任せします」
安雲は悲しの表情のまま桐原の隣へ並ぶ。

ミランダは森川の苦しむ姿を見て思わず駆け寄っていった。

「止めるんだ……もう遅い……」桐原はミランダの手を掴んでいた。

「離して！ あの人が苦しんでるのよ！」
ミランダは桐原の手をほごうと暴れる。

桐原から見えて森川の異常な状態はわかっていた。

異形を召喚するにしてもあの数を同時に出す事は人間には不可能だ。魔力が根本的に足りないのである。

それを成し遂げているからにはなんらかの仕掛けがあると踏んでいた。

「森川は異形を体内に招き入れています……」安雲は真実を伝える。

「馬鹿な……そんなことをすれば……永遠に囚われる」
桐原は言葉を失い掛ける。

大きな叫びと共に森川の動きが止まる。

それは意識が奪われた事を意味していた。

桐原はミランダを横に突き飛ばして走り出していた。
救う手段はない。それが異形との契約を結んだ者の末路である。
意識を奪われた以上、速やかに処理しなければ森川を媒介にして異形が溢れだすはずだ。

ミランダの叫びが聞こえる。

桐原はそれを無視して強化の術式を展開する。

走る速度が飛躍的に上がり、森川めがけて跳躍をする。

この事件を終わらす為に拳に強化された力と魔力をかき集める。
森川の頭部をめがけ拳を突き出す。

その瞬間

森川と桐原の拳の間に黒い異形が割り込んだ。
かまわずその異形ごと破壊する為に魔力を叩きこむ。

「！」

桐原の拳は確かに影ごと森川の頭部を粉碎したはずだった。

森川の姿はすでにそこにはなく、粉碎された異形がもんどりを打つ。

森川だった者は素早く獣のように移動し距離をとる。

その背後には既に十数体の異形種が姿を現していた。

桐原は後ろに跳躍をし、距離をとる。

「遅かったか……」桐原は四つん這いから立ち上がる森川を見つめた。

森川だった者は雄たけびを上げる。

それに同調して異形達が素早く散ろうとした。

轟音とともに数体が吹っ飛ぶ。安雲であった。

森川は安雲に向かって咆哮をし、会場出口へ跳躍をした。

それはもはや人間業ではなく強化した桐原さえも遙かに超越したジャンプ力である。

「桐原さん！　ここは私が引き受けましょう。森川を」

そういうより早く安雲は異形めがけ走り出していた。

森川は出口でもう一度、咆哮上げ差し込む光へ消えた。

「ミランダ！　お前はここにいろ！」桐原は跳躍をしながら叫ぶ。

異形達を飛び越え、桐原は森川の後を追う。

ミランダを残したのは森川と対峙するより安雲といった方が生存でき

ると判断したからだ。

「 待つて！ 私も 「既に安雲とミランダは異形に囲まれて
いる。」

「引き受けました。桐原さん」安雲は飛びかかる異形を衝撃波で粉
砕する。

「ミランダさん、まずはここを抜ける事をお考えください」
「言われなくても！ そうする！」ミランダは術式を発動する。

桐原は出口でもう一度振り返る。

安雲は信用できないが、今はこれしかないと言い聞かせ森川を追う。

「私がいると彼は意識を取り戻せないでしょうから……」安雲は小
さく呟いた。

ホールでは演劇でもミュージカルでもない。生存を掛けた殺し合い
が始まった。

贖罪への階段 第18話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

皆さんにご質問があります。

第一部終了が間近です。第二部をご希望の方がいらっしやいましたらコメントにお書き頂けたらと思っています。

贖罪への階段 第19話（前書き）

グロテスクな表現や残酷な描写がありますのでご注意ください。

贖罪への階段 第19話

桐原は会場から飛び出す。

既に森川の姿はない。その代わりに何体かの異形が召喚されていた。醜く歪んだ表情と得体の知れぬ触手が蠢いていた。

異形が動き出す前に走り出す。

今まで森川が召喚した異形達とは明らかに姿形が違っていた。召喚主が高等種に変わった為だろう。それは脅威が格段に上がった事を意味する。

5メートルまで接近し一気に跳躍し、顔面へ拳を叩きこむ。

異形の醜い顔は拳の形に陥没した。

後頭部からは衝撃波により押し出された頭蓋と脳髓が飛び散る。

桐原の頬を異形の触手が掠めていく。

生き残っている異形が一斉に触手を飛ばしてきていた。

桐原は最小限の動きで鋭い触手をかわしていく。

黒いコートには何箇所かの穴が開いていた。

拳を異形の胸辺りに打ち込み術式を発動させる。

衝撃波が異形の体を突き抜け廊下の壁を陥没さる。

コートに刺さったままの触手を引きちぎり、廊下の先を見つめる。

森川の後ろ姿が階段へと消えた。

階段までの廊下にはまだ4体ほどの異形が甲高い声を上げ蠢いていた。

後を追うべく大きく息を吸い込みコートの内側から術具を取り出す。

桐原の術具は、柄のないナイフである。その表面にはルーンが彫られている。

左右に2本ずつ計4本を同時に投げつけた後、一気に間を詰める。

術式を詠唱した瞬間、術具は大きさを変化させナイフから剣の大きさに変化をする。

3体の頭部を貫いた。倒れる異形の間をすり抜ける。

最後の一本が異形の左肩へと突き刺さる。

「チッ」舌打ちをし、異形の肩に刺さった術具を掴んで切り降ろす。

異形は寒気がする悲鳴をあげて絶命した。

手に持つ術具を投げ捨てる。桐原の術具は使い捨てタイプだった。時間が経てば大きさも元に戻るが、魔力を充填しなければ再使用は不可能である。

桐原は階段を駆け上がる。

強化を施してある為、あつというまに階数を表示する数字は数を増やしていく。

森川と桐原は天に向かって階段を駆け上がっていった。

ミランダは安雲の戦闘能力に驚きを隠せなかった。

彼女もれっきとした魔術士である。だが能力の差は歴然だった。こちらが2体倒す間に安雲は6体を肉の塊に変えていた。

「そろそろ大丈夫ですかね……」安雲は出口を見て呟いた。

「この状況が大丈夫とは思えないわ」

ミランダのいうとおりまだ異形は7体も残っている。

この状況をそんな言葉がでる安雲は異常だとミランダは思った。

「いえ、ここではありませんよ。このホールの外の事です」

「貴女は森川を追うべきだ……次の攻撃をしたら出口へ走ってください」

安雲はそう言う手を異形へかざす。

「……貴方はどうするの？」警戒をそのままにして安雲を見る。

「私でしたら問題ありません」安雲はきっぱりと断言する。

轟音と共にホールの空気全体が揺れる。

安雲が能力を発生させ、異形が肉片と血しぶきをまき散らす。

「今です！ 行きなさい」

ミランダは振り返らず出口へ走った。行く手を遮ろうとした異形は

安雲の衝撃波で引き裂かれる。異形の血を浴びながらもミランダは走り抜けた。

出口へ消えるミランダを見送った安雲は残った異形へと振り向く。

「……これで本気を出せます……」

振り返った安雲の手には半透明の大剣が握られていた。

その剣はまるで水晶で作られたかのような美しさを持っていた。古代文字が剣の中心を縦に走っている。

大剣を肩に担ぎ、ゆっくりと間を詰める。

その大剣を見た異形達は何かに脅える様に後ずさを始めた。

一体の異形が逃げ出そうとしたのを合図に安雲は跳躍する。

その跳躍は異能者の物でも人間が保有する筋力でもなかった。

瞬時に異形を両断し、素早く次の標的へ振り下ろし肩から袈裟切りする。

異形の鋭い爪が安雲の背中めがけ振り下ろされる。

それを背を向けたまま掲げた剣で受け止め、振り返り様に切り捨てた。

逃げ出す異形へ手をかざして粉碎する。

最後の一匹はすでに出口付近へ到達していた。安雲は大剣を投げつけ座席ごと貫く。

ホールは静寂を取り戻していた。

安雲は突き刺さった剣を引き抜き、剣を消滅させる。

光が差す出口に差しかかった時、一度振り返りドアを閉める。

ドアが閉じられる時、光の合間から一枚の羽根が舞い落ちた。

贖罪への階段 第19話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

次回が最終回の予定です。

反響があれば第2部へと続く予定です。

贖罪への階段 第20話（前書き）

グロテスクな表現や残酷な描写が
ありますのでご注意ください。

贖罪への階段 第20話

桐原は屋上へと辿りついた。

普段は人が立ち入り禁止なのだろう分厚い鋼鉄の扉がひしゃげている。

注意深くその隙間から周囲を伺う。

吹き込む風は冷たく、そして強かった。

灰色のコンクリートと空の青さが対照的だと桐原は感じていた。慎重に屋上へ侵入する。

森川は屋上を中心に佇んでいた。

その顔は空を仰いでいた。

何かに勝利したかのような表情で何かを呟いていた。

風が強く聞き取れない。

周りには異形はいない。桐原はこの機を逃す訳にはいかなかった。森川は既に高等種に肉体を支配されている。高等種と人間が対等に戦えるはずもなかった。一気に畳み込まなければ桐原に勝機は無い。

桐原は残った術具を全て取り出す。数は4本……

森川に向け全力で投げつけ走り出す。

ナイフは大気を切り裂きながら目標へ殺到する。

ナイフが桐原の発動で形を変える。

術具が到達する直前、森川は片手を体の前に突き出す。それは捕まえた獲物を見せるようなしぐさだった。

刹那、その手には異形が現れた。

術具は森川ではなくその手に掴んでいる異形へと突き刺さる。

桐原はそれに構わず突進する。術具が防がれるのは予想していたからだ。

突き刺さった剣へ拳を叩きこむ。

剣に拳が衝突したと同時に魔力も開放する。

異形に突き刺さった剣はナイフが桐原の術式で大きさを変えたものだ。

ナイフには柄はない。強化した拳と衝撃の魔力で術具は異形を突き抜ける。

術具が突き抜け、その衝撃で森川が盾にした異形の首がもげる。

血を吹き出しながら転がる異形とその頭部を掴む森川手に力が籠る。

それは森川の腹部に深々とささる剣がもたらす痛みからだった。

雄叫びを上げ、握っていた頭部を粉碎する。

後ずさりする森川に向けて桐原は第二撃を打ち込む。

左手に力を込め精一杯脚を踏ん張る。森川の右わき腹へむけて拳が放たれた。

肋骨が粉碎される感触を合図に衝撃を発動させる。

衝突事故のような音が屋上に響く。肋骨は粉碎され内臓は破裂したと

桐原は確信した。森川の体は衝撃に抗う事ができず転がっていく。通常の人間であれば即死のはずである。

森川はまだ動いていた。

桐原は間髪をいれず跳躍をする。頭部を破壊する為に狙いを定める。右手に魔力を集め、拳を握る。

ふりかぶった瞬間、森川は左手を裏拳のように振り上げた。

咄嗟に腕を十字にし防御をとる。

森川の腕は桐原を体ごと数メートル飛ばした。転倒した体は止まることがなくコンクリートの上を滑って行く。

衝撃で呼吸が不自然になる。

立ち上がろうとした桐原は自分の左腕に違和感を覚えた。左腕は糸の切れた人形のように揺れている。

骨が折れたのだろうか激しい吐き気が襲ってくる。

森川は腹部からの出血を気にも留めず立ち上がろうとしていた。口からは血の泡が吹き出していた。それを拭いながら笑みを浮かべている。

桐原も左腕を抑えながら立ちあがった。異形の恐ろしさを改めて感じる。即死の状況を再生能力でカバーしているのだろう。

頭部を破壊しても果して絶命するか疑問に感じていた。

桐原は右手をかざして術式を詠唱する。

目を閉じ魔力が高まるのを待つ。

高まった魔力を解放するように目を開ける。

右手から轟音と青い稲妻がコンクリートの破片を上げ森川へと疾走する。

その稲妻は森川の咆哮でかき消された。

電気が弾ける音と舞い上がった破片が落下する。

異形種には生まれながら魔術や神秘を防ぐ結界が存在する。

それは異形としての階級に比例して強大になっていくことは桐原もしっていた。

その為、桐原は肉体その物に魔力を叩きこむ術を磨いてきたのだった。

「……効く訳ないよな……」 苦笑いがでる。

先程は隙をついての連撃が成功したが、今度はそうもいかないだろうと思っていた。

既に森川は反撃の準備を整えており、素手でも当たれば桐原の骨など軽く粉碎する。

右手一本で攻撃しなければならぬ。状況は絶望的だった。

森川の目の前に異形が召喚される。

ぼろ布を纏い、手には毒々しい形の短剣を握っている。
顔は腐り、四つん這いのままこちらを窺っている。

桐原は残された魔力をすべて肉体の強化へと回す。

異形を倒してる余裕はない。すばやく異形をかわし、森川の頭部を破壊する。

それが桐原に残された手段だった。魔力が行き渡るまでの時間が惜しかった。

雄叫びを上げる異形は蛙のように身を屈め、跳躍の準備を開始する。

異形は跳躍しなかった

正確にいうのなれば出来なかったのだ。

飛ばうとした異形の頭部には森川の術具が突き刺さってた。

体を痙攣させながら前のめりに倒れる。

森川は腹部を抑え膝まづく。

出血は止まらず、吐きだす血は量を増していた。

「……………早く……………」殺せ……………」血の泡を出しながら静かに叫んでいた。

「森川……意識を取り戻したのか？」

「……一時……的に抑えている……だけ……」最後まで言葉は出ず血を吐きだす。

「この痛みが……きつかけ……だ……」

森川はそう言って体を貫通している剣を指差す。

「今のうち……再生不可能な破壊をすれば……」桐原へ嘆願をする。

桐原は静かに頷くと森川へと近づいた。

森川は痛みで奪われそうになる意識を繋ぎとめていた。

時より自分の手で刺さった剣を動かす。

そのたびに森川からは出血と叫びがあがっていた。

「同情はしない……」桐原は右腕を打ち込む準備をする。

桐原は森川の過去に同情していた。だがそれを口に出すのは憚れた。

肉親を失った悲しみは当人にしかわからない。同じ状況に置かれてもそれは同じ感情ではなく、あくまで似た感情なのだ。失った人間が違うように……

「待って！ 殺さないで！」

二人は声の方向を向く。

そこにはブロンドの髪を振り乱して駆け寄るミランダがいた。

「殺せ！」短く強く森川は叫ぶ。

桐原は構え直す。

次の瞬間、ミランダの術具が桐原に向けて風を切る。

桐原は後方へ跳躍する。

ミランダは術具を発動させ杭が無数の針へと変わる。

桐原は体をひねりそれをかわす、コートに何本かが刺さり突き抜ける。着地し、体勢を整える。

「この人は殺させない……」決意に満ちた目をしていた。

「ミランダ……森川はもう助からない」

「二人で逃げましょう。もう一度二人で……」

ミランダは甘える様に森川に話しかけていた。

桐原は森川が助からない事を知っている。

森川に与えた傷は常人ならば即死である。現在、森川が生きているのは

体内の異形が治癒したからだ。完全にではないまだ途中のはずだ。

このまま森川が意識を保っていれば異形は治癒できない。死を迎えれば異形が完全に体を支配する。

治癒できない今しか異形を殺す方法は存在しない。

「……ど……け」森川はミランダを見ずに手で払いのける。

「嫌よ！一緒に……」ミランダは涙声になっていた。

ミランダも森川に助かる方法がないのを知っていた。だが深い愛情がある故、認めることができないのであった。

森川は叫び声を上げ立ち上がる。

血液は溢れだし、脚は震えている。

ミランダを避ける様に後ずさりをする。

一歩一歩踏みしめ、血だまりを増やしていく。

「待つて……お願い……だから」ミランダは立ち上がれず手だけを伸ばす。

森川は屋上の端まできていた。その先には踏みしめる物はない。

「魔術士よ……神はいると思うか？」森川は質問する。

「……いるだろうよ。ろくなもんじゃないと思うがね」桐原は笑みを浮かべる。

森川も笑っていた。

「貴方の事を……愛してます」ミランダは泣きながら森川に伝える。

涙は灰色のコンクリートを黒く変色させる。しっかりと森川を見つめていた。

森川は大きな叫びを上げ、腹部に刺さった剣を抜いた。
大量の血液をまき散らす。剣を桐原の方へ投げ、そのまま宙へ飛び出した。

贖罪への階段 第20話（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

これで第一部は完結とさせていただきます。

誤字脱字、文法など突っ込み所が満載でしょう。
ですが生暖かい目で見てください。

ちなみにプロローグ 1～20 プロローグとなりますのでご注意
くださいね。

ご要望が寄せられたら第二部へと進む予定です。

読んで頂いた方には感謝しかありません。
改めてお礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5743h/>

贖罪への階段

2010年10月14日12時17分発行